

14 MAR. 1935

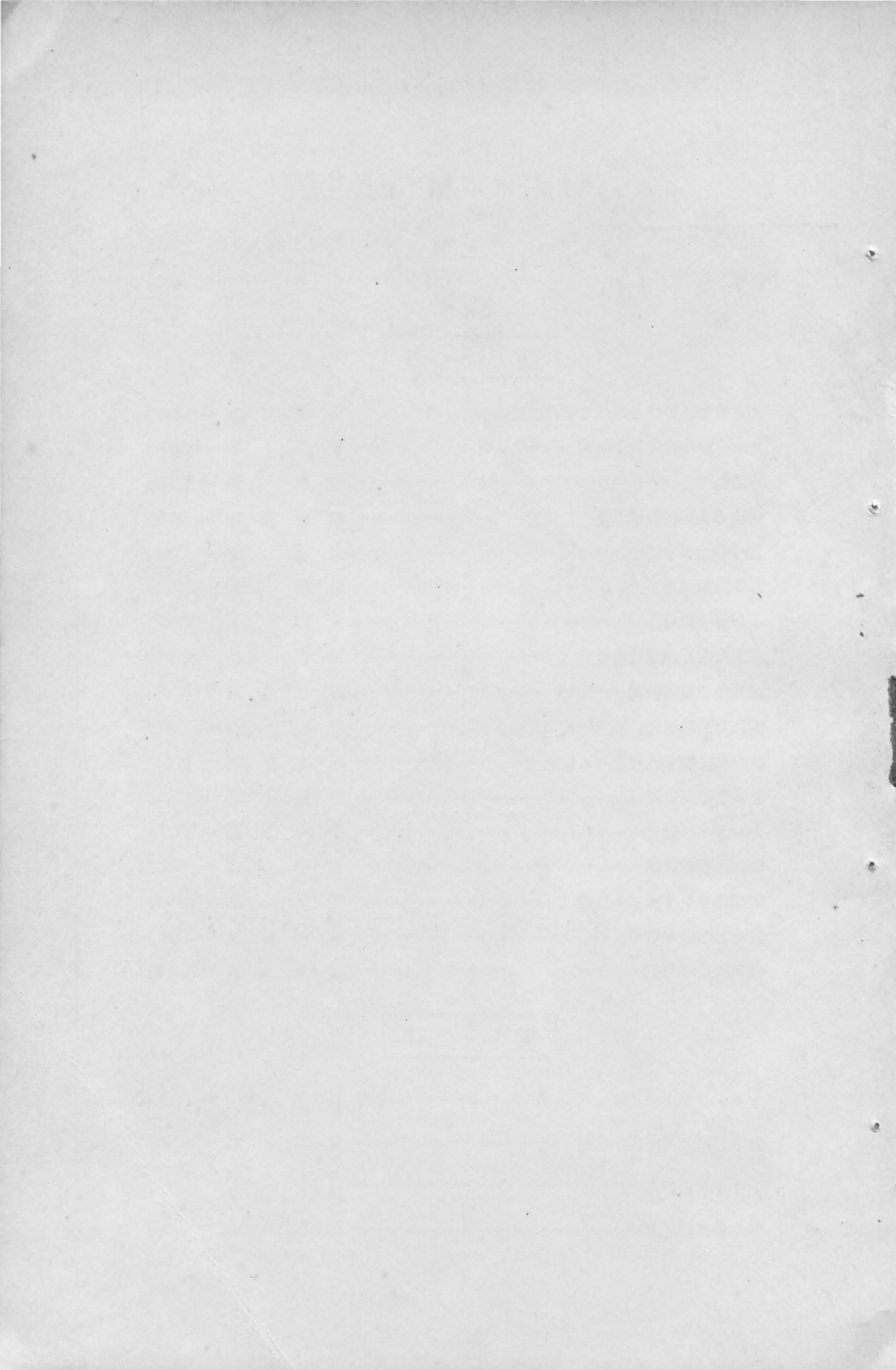


# 宮崎リンネ會報

第九號

昭和十年三月七日

宮崎高等農林學校宮崎リンネ會



# 宮崎リンネ會報第九號

(687) ... 事 録 ..... (昭和) 虫類會 ... 宮  
 (177) ... 事 録 ..... 宮崎博識

## 目 次

### 論 說

菊科植物に於ける舌状花の筒状變化.....	宮 澤 文 吾 ... (701)
スミレ屬植物の異常花例.....	飯 田 章 ... (703)
細菌雜記.....	蛭 原 操 ... (706)
植物の花器の發達と分化に就て.....	松 原 茂 樹 ... (709)
日向沿岸漂着植物.....	日 高 醇 ... (711)
宮崎菌類雜記 (六).....	遠 藤 茂 ... (713)
屋久島植物目錄.....	大 村 勇 ... (717)
本庄町附近採集植物目錄 (二).....	後 藤 弘 ... (726)
國見岳の植物概観.....	吉 江 清 朗 ... (731)
蛇類の實驗法特に蛇皮鞣法の實驗に就て.....	中 島 茂 ... (735)
宮崎高農蠶室に飛來せる昆虫.....	四 本 正 秋 ... (743)
宮崎縣蟲叟數種.....	伊地知 重 基 ... (745)
ハンザキに就て.....	齊 藤 五 郎 ... (747)
趣味の蜘蛛採集.....	王 寺 幸 寛 ... (750)
天草産サソリモドキに就て.....	岡 田 正 憲 ... (756)
宮崎市附近の雙翅目.....	高 橋 尋 匡 ... (757)
奄美大島の貝類.....	豊 島 正 ... (759)

### 要 録

ギンモクセイの大木.....	日 高 醇 ... (765)
材中に残れる落書の痕跡.....	日 高 醇 ... (765)
コミカンの古木.....	日 高 醇 ... (767)
11月の丸島昆虫.....	伊地知 重 基 ... (767)
	高島田 政 彦 ... (768)

# 會 記 本 事

宮崎リネ會略史(承前) .....	幹	事 … (769)
編輯後記 .....	幹	事 … (771)

## 目 録

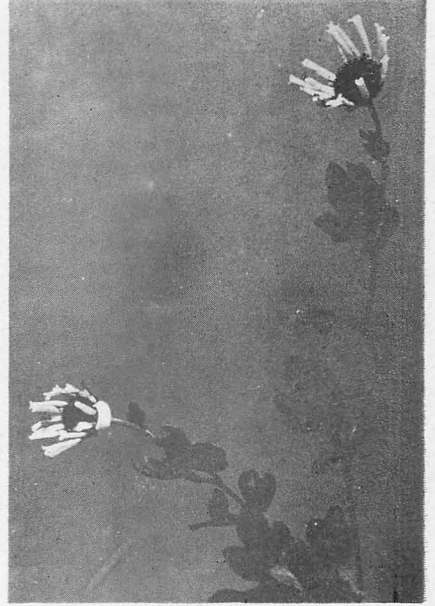
(107)	… 宮 文 新 宮	… 出雲守國公孫孫宮をもつて神廟材木	
(108)	… 兼 田 宮	… 宮司宮長の神廟材木	
(109)	… 兼 田 宮	… 神廟材木	
(110)	… 兼 田 宮	… 丁銀の計帳の取費の取計の神廟	
(111)	… 兼 田 宮	… 神廟新築の事向日	
(112)	… 兼 田 宮	… (六) 神廟神宮	
(113)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(114)	… 兼 田 宮	… (二) 兼田神宮の取計	
(115)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(116)	… 兼 田 宮	… 丁銀の取計の取費の取計の取計	
(117)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(118)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(119)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(120)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(121)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(122)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(123)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(124)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(125)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(126)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(127)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(128)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(129)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(130)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	

## 目 録

(131)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(132)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(133)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	
(134)	… 兼 田 宮	… 兼田神宮の取計	



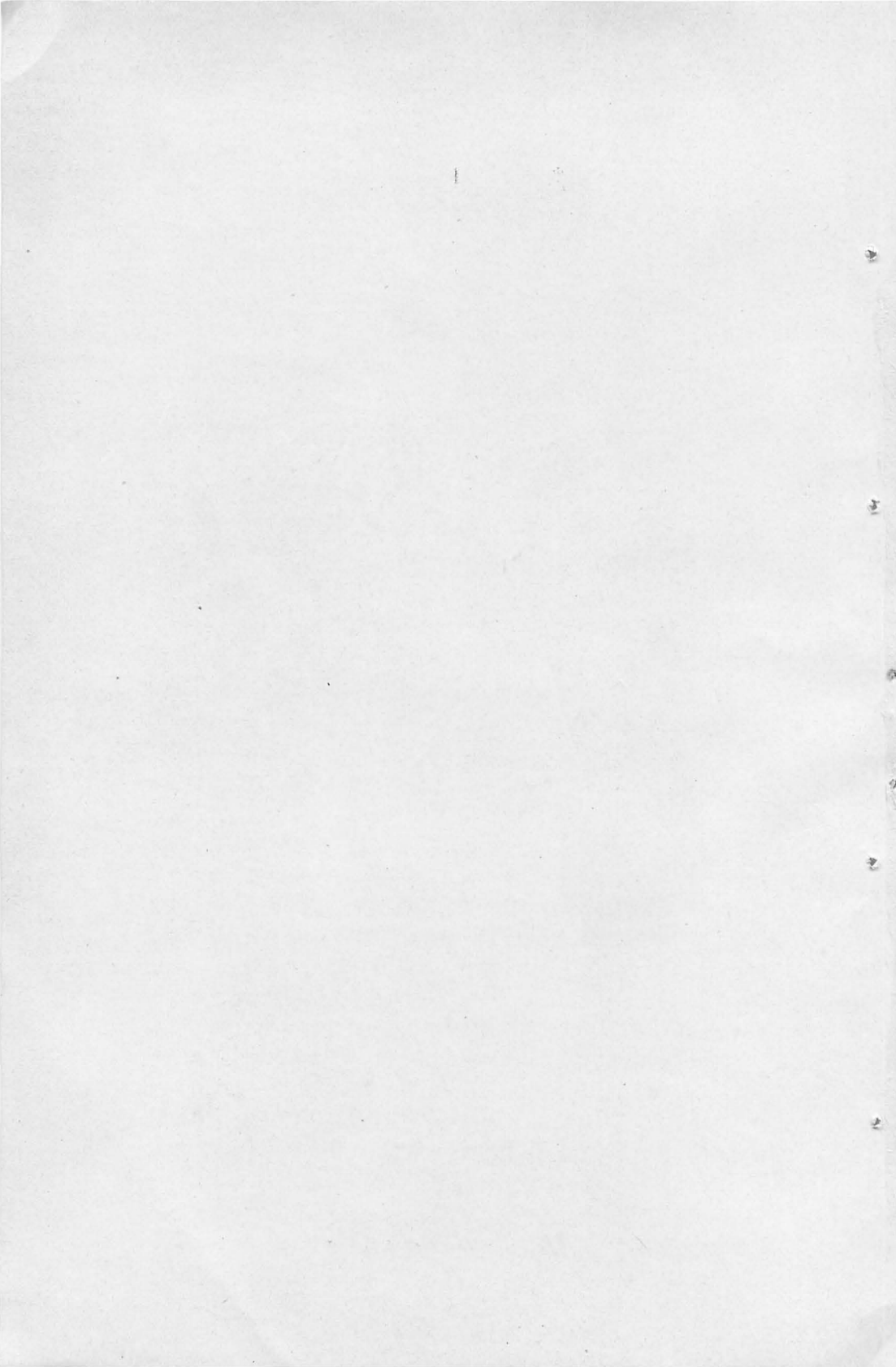
第 1 圖 ノヂギク



第 2 圖 リウノウギク



第 3 圖 ツハブキ



No. 9 March 1935

## 宮崎リンネ會報

Annals of Miyazaki Linnean Society

第九號

昭和十年三月

## 菊科植物に於ける舌狀花の筒狀變化

宮澤文吾

栽培菊には良く發育した筒狀花冠を持つ居る品種は甚だ多い、其極端なものは彼の管咲と呼ばれる品類で太いのもあれば極めて細く且つ非常に長くなるものがある、細管咲といふのが之である。

斯様な變化は既に遠い昔に起たのでそれが一旦起てから段々に實生をされて今日の多數の品種が出るに至つたのである。

栽培植物には様々な普通でない形態を具へたものが少くはなく、菊の管咲なごも其の一つと云ふことが出来る、然らば斯かる變化は栽培するといふことに依て始めて起つたのであらうかといふ問が起きて來るであらう、併し私は單に栽培するといふ其事自体が變化を起させるのではないと思ふ、栽培と自然との差が斯かる變化を起させるか否かといふ程に異つて居るとは考へられぬ、栽培でも自然でも變化は同じ様に起るものではないかと思ふ、只異なる所は栽培する場合には觀察がよく届くのに対して自然の状態に在る時には十分なる觀察がされない、従て變化が起て居ても遂に發見されずに終ることが多いのであると考へる、又變化其ことが其植物の生存に好都合であれば繁榮し従て人の目にもつき易い、けれども此反對である場合に遂に自然に消滅して終ふ場合が多いと考へられる。

例へば斑葉は植物の生育の爲には不利な形質である、現在日本には斑葉植物が觀賞用として随分澤山に植ゑられて居る、種類に依ては斑葉で

も丈夫に生育するものがあるけれども中には非常に弱いものもある、それでも人間が生育の爲に場所を廣くしたり或は他の繁茂する植物と遠ざけたりして保護を加へると漸く生命を維持して行くだから斯様なものを他の植物と混生さして置くと自然に勢力が弱り遂には枯死の運命に陥る。所て斑葉植物は園藝上にもみ存生するかといふとそうばかりではなくて自然界に於て甚だ多く發見され得る、之が實例の詳細は茲には省畧するが私は多數を發見して居る、只茲では自然界に於ても斑葉が起ることが少くないといふ事實を認めて貰ひ得れば足りる。

扱本題に戻て菊の筒狀變化に就いて述べる、私は數年來ノヂギクの自然での變化を研究すると共に自然種から實生をして栽培菊と同一形質を帯びるものを作出さうとして居る、此研究に當て先づ第一に發見したのがノヂギクの舌狀花が筒狀に變化したものである、之は秋に咲いて居る時期に良く見て廻ると時々發見するので私は數回遭遇して居る、但し總ての舌狀花が完全に變化したものには未だ遇はぬ、少い場合には一頭狀花の舌狀花の中一個丈が筒狀になつて居ることもある、第一圖に掲げたのは筒狀花の多いものである、之で見ると完全な筒になつたのもあるが半ば舌狀をして居るに過ぎない花が多い、それかといふて完全な舌狀花も全く残て居ない、此外全体の二割乃至三割が筒狀に變化したのも現に校内に栽培されて居る。

次にはリウノウギクである、此キクは宮崎縣では東臼杵郡に於てのみ見出されて居る、昭和七年十一月に可愛岳へ日向長井から登てリウノウギクの探索を試みた、其際目的は直ぐに達せられて驛附近から山路を登り始めると忽ちに此菊に遭遇して喜だことは今も記憶に新である、それから段々登て殆ど中腹の路傍で意外にも第二圖に示した様な全部の舌狀花が然かも完全に筒狀に變北した株に出遇ふて、今度は喜を越えて驚嘆稍久ふしたことは單なる支那流の形容のみに止まらなかつた、然かも此株は貧弱で寫眞に示した二本の枝があつたのみで根側に發育して居る芽も少なかつた、それ故掘取ては來たが誠に遺憾ながら芽を出さなかつたから現在生きた植物は無い。

第三にはツハブキの花に就いて説明する、之の筒狀變化は昭和八年十一月に川南驛附近で列車を待つ間に夕方殆ど薄暮になつた時路傍で偶然に見出したのである、昨年は之に力を得てツハブキを見る度に注意して居たが採集に出掛ける機會は多くなかつた爲に遂に見當らなかつた、所が本年一月十三日に鷓戸村へ行て此變化が多數に有ることを見出して又



驚かざるを得なかつた、第三圖に示したのが其一例である、青島村の野島から鷓戸へ向ふ途中には諸所で之を發見し得る、數株を持ち歸て植ゑてあるが猶惜しいから残して置て來たものも少くはない。

以上三種の植物丈は從來に得られた實例である、恐らく他の菊科植物でも同一の變化が見出し得られるのではないかと考へる、果して見出し得るか否かは面白い研究題目であると思ふ、野生植物から斯かる變化を發見したことは少くとも未だ文字に現はして傳へられて居ないと思ふ。斯くして之を栽培して行けば立派な園藝品となり得るのであるし、又一方には植物の變化といふ植物學上の問題にも觸れ得るのである。

最後に諸君の觀察の結果同一品を得られた場合には其標本なり生きた植物なりの御寄贈を御願したいものである。(二月十一日夜記)

## スミレ屬植物の異常花例

飯 田 章

### 序

スミレ屬植物の異狀花に關しては、既に A. D. Cugnac, H. Melchior und W. Becker, M. Takenouchi 等の記載がある。

著者も近年スミレ類の分類を志す傍ら、異狀花の出現に注意を拂ひ、その好例をケナシスミレ、タチツボスミレに得たので以下記載する事にする。

#### A. 1 距 6 瓣のケナシスミレ (Fig. 1.2.)

昭和九年春、安藝 (S. yoshigaya) に採集されたケナシスミレ *Viola mandshurica* W. Beck. var. *glabra* Nakai の中に花瓣、萼共に 6 枚宛有する異常花を二箇見出した。正常の側瓣、唇瓣の間に花瓣が生じ、其の對稱位置即下萼と唇瓣の間に異常な萼が生じたもので、異常花瓣は形狀及び鬚毛を有する點より第三の側瓣と認められ、異常萼は耳垂の形狀より上萼に類するものと思はれる。尙、雄蕊其他の眞正繁殖器官には、何等の變化をも認めなかつた。

B. 第三下萼發生に伴ふケナシスミレ異常花の一連

本例は、距の増加なき場合より異常形距、更に二距を有する異常花を集めたもので唇瓣の背後に、何れも第三の下萼を發生して居る。瓣片は五一六枚。之等は、何れも2×5米位の狭少な地域に、約四拾花を検して十五花を得たものである。採集地は安藝 (S.yoshigaya) である。以下異狀の度を追つて記載する。

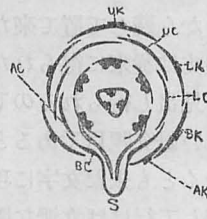


fig. 1.  
異狀六瓣下萼花  
花式圖  
AL...異常側瓣  
AK...異常萼  
(原圖)

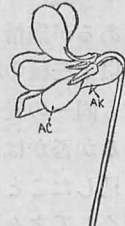


fig. 2  
前同花ノ一箇  
AC...異常側萼  
AK...異常萼  
(原圖)

1. 萼にのみ異常あるもの

十五例中三例を見るもので、距、花瓣には何等の異狀も認めず、唯唇瓣の背位、兩下萼の間に、形態上下萼と認められる異常萼を發生したもので、此の萼は、距背に沿つて反捲し、後向して居る。尙此の例で注意すべきは、其の唇瓣が通常鈍又は圓頭であるべきなるに、凹頭又はハート型の凹頭を有する事で、之は次の例への一階段とも思はれるものである。

2. 萼及び花瓣、距の形狀に異常あるもの

十五例中三例を見るもので、前例と甚だしい差異は無いが、唇瓣は距を除いてはほとんど二分し、距は甚だしく横幅を増して中央は淺く縊れ

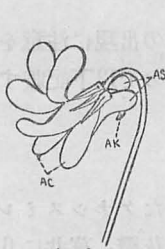


fig. 3  
大距花ニ距花  
AC...異常側萼  
AK...異常萼  
AS...異常距  
(原圖)

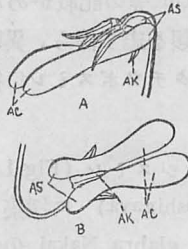


fig. 4  
前同唇瓣花萼  
A...側面圖  
B...腹面圖  
AC, AK, AS 前同  
(原圖)



fig. 5  
前同花式圖  
(原圖)

て居る。此の距は、正常な距の二倍大である。之の異常が極度な場合、次例の様な異常花となる。

### 3. 二距六瓣六萼の異常花 (Fig.3.4.5)

本例は其の發生が最も多く、十五例中過半数の九例を見たもので、唇瓣は各一距を携へて完全に二箇になり、稍細身である以外、正常な唇瓣との差は見られないし、距の形状も各正常である。萼は兩距の間を通つて正常な下萼と共に前向して居る、著者は此の例に於て、或は有距雄蕊が四箇に増加しては居ないかと期待して解剖を行つたが雄蕊は正常花に於ける通り二箇の有距者しか見なかつた。

尚、前二例共雌雄蕊には異常を認めない。又、1例と3例が同一株に生じて居るものも有つた。

### C. 三距のタチツボスミレ異常花 (Fig.6)

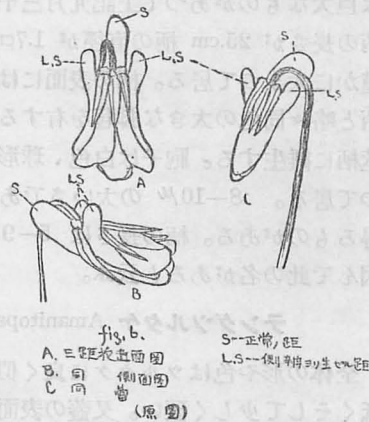
昭和九年四月八日、安藝國吳市の郊外 (S.yoshigaya) に十株位此の異常花を有するタチツボスミレが發見された。

此の畸形は、上述の何れの異常形態にも増して、グロテスクなもので、當時父 (採集者) より書信の一節に

『此の一群は、殆すゞ拾株位繁殖して、全部是です。但し通常花は一枝に一つ位咲いて居ます。蕾を正面から見ると二個の側距がニヨキニヨキと立ち其の間から角張つた二枚の萼が花瓣の上に被つて異常に長い馬の面を見る様です。』

とあるが、實感だと思ふ。即ち此の例では、側距が何れも正常距の三分の一位な可愛い距を生じ、其の距は上に向つて居る。且つ、唇瓣の距は異常に増大して、正常花の距の三倍大である。但し、その唇瓣は正常なるものより多少小さくなつて居る。其他の部分には異常を認めない。側距の距が、雄蕊の距を容れて居ない事は勿論である。

以上、スケッチと共に簡単に報告して置く。



## 稠 菌 雜 記

蛭 原 操

### ツルタケ *Amanitopsis vaginata* (Bull.) Roze

本菌は昭和九年九月二十二日宮崎市下北方の路傍で採集した。又同年同月三十日にも同じく下北方の雑木林中で採集した。以前に六月十三日に矢張り下北方の公園へ上る途筋で採つたこともある。蓋の表面は鼠色或ひは灰褐色で時には銀灰色を呈することがある。蓋は扁平であつて其の表面周縁部に扇襞状の條を有する。中央部が僅か皿状に窪んで居るのが普通で此中央部は濃色を呈して居る。蓋の直径は略々 4—7.5cm 時には巨大なものがあつて上記九月三十日に採つたものは蓋の径が 12.5cm 柄の長さが 25cm 柄の直径が 1.7cm もあつた。柄は白色で下部へ漸次僅かに太まつて居る。柄の表面には往々微褐色の斑點が點在して居る。柄と略々同色の大きな脚苞を有する。稠は白色、而して軟らかで脆い、莖柄に離生する。胞子は白色、球形或ひは廣楕圓であつて一端が鋭く尖つて居る。8—10 $\mu$  の大きさである。柄に稀に白色の鏢の痕跡を認め得るものがある。柄の長さは 5—9 cm 丈の高い稠菌で、鶴の長い脚に因んで此の名があると云ふ。

### テングツルタケ *Amanitopsis strangulata* (Fr.) Roze

全体の形や色はツルタケに良く似て居るが一般にツルタケよりも丈が低くそして少しく硬い。又蓋の表面の褐色も幾分か濃いやうに思はれる粘り氣を有し、蓋の表面に厚くて硬い圓錐形の疣粒を多數に散生して居るのがツルタケと異なる一大特徴である。此の疣粒は白くて外觀上毒菌のテングタケと相似して居る故、斯く命名せられたものであると云ふ。多數群生する。昭和九年九月二十九日宮崎市下北方の林中で採集した。

### サイギヤウガサ *Panaeolus retirugis* Fr.

昭和九年九月六日に、夏期實習中、宮崎郡瓜生野村に早害見學に行つた際、同村の路傍の馬糞上に生じて居たのを採集して來たもので、本菌は蓋の径が 1.5—3.5cm で、丸味を持つた圓錐形乃至半球形で粘性を帯びて居る。若いものは鐘状である。表面が膜状、淡黄色であるが全体としては白色に見える。稠は莖に離生して居て暗鼠色或ひは紫黒色である

略々大中小の三種の蓋がある。柄の長さは6.3--12 cmである。微褐色を點在した白色、略々蓋表面と同色である。柄は少し纖維質で稍々固く強く直立する。中空であつて鏢も脚苞も有しない。胞子は未熟のうちは黄色、熟すると褐紫色乃至暗鼠色を呈する。胞子の形はボート形或ひはレモンの果實に似た形である。同年の九月三十日にも下北方で採集した。一日放置して置くと大抵は黒變して汚汁を流して溶失する。

**アラゲカハキタケ** *Lentinus rudis* (Fr.) P.Henn.

昭和九年の九月十日、東諸縣郡本庄町で楓樹に多數寄生して居るのを見付け採集して來た。菌傘と菌柄とから成るのであるが、菌柄は明瞭な區切りがなく菌傘から延長し全体革質である。形はや、扇形に似て居り、周縁が裏面に向つて捲曲して居る。表面は汚黄色、粗毛で被はれ一見すると皮革のやうに見える。褶は淺くて菌柄部迄延長し黄色の木材の色である。胞子は略々球狀で大小不揃ひである。

**ウラムラサキ** *Clitocybe laccata* (Scop.) B. et Br. var.  
*amethystina* (Vaill.) B. et Br.

これは林産製造室の前の楠樹の下に永い間生えて居た小さな綺麗な紫色の菌である。昭和九年の九月頃から同年十一月中旬頃迄多數生えて居た。蓋はその形が半球狀のものが多くて、若いうちは更に一層つぼんで居る。後には扁平となる。蓋の表面の中央が陥入して居る。莖は中空である。幼時は鮮紫色を呈し漸次日を経るに従て褪色して茶褐色となる。胞子は極微紫色で球狀、その大いさは徑約  $8.5\mu$  が普通である。

**コタマゴテングタケ** *Amanita mappa* (Batsch) Fr.

本菌は毒菌である。昭和九年九月二十九日、宮崎市下北方の雑木林中で採集した。全体が鮮黄色で褶は色がや、淡い。莖には鏢と脚苞とを有して居る。鏢は膜狀で顯著なものであつて。特に幼時のものは廣く、褶の下方に擴がり、蓋膜として附着して居る。脚苞は球狀で且つ固く莖の下部を包んで居て、ツルタケの脚苞のやうに橢圓形でしかも上部が開口して居るものとは全く異なる。蓋の形は初めは球狀である。其の表面は平滑で光澤がある。褶は莖に離生する。

**カラカサタケ** *Lepiota Procera* (Scop.) Quel.

昭和九年九月三十日及び同年十月十日に何れも宮崎市下北方町の林中にて本菌を採集した。蓋の徑が 12--18cm. 莖の徑が 1--1.6cm 莖の長さ

が 19—30cm あつた。蓋の部は全体が弾力のある軟らか味を持つた菌である。蓋は扁平で中央部が凸出して居り、表面は白色の地色の上に多数の褐色鱗被が散着して居る。が中央部のみは鱗被に剥けないで濃褐色を呈して居る。褐色鱗被の外方に近いものは大部分が剥起して居る蓋より離れかゝつたものが多い。周縁部には殆ど離脱して鱗被がない。中央部の剥けない部分は滑らかである。褶は白色で密に生じて居て、柔かく弾性があつて綿蒲團のやうな觸感をする。莖は略々圓柱状であるが下方へ次第に僅かに太まり最下部は丸い塊状をなし白色菌絲を附着して居る。長くて相當の強さを有し折れても、先づ折れ曲るのみであつて二つに折れ切れることはない。莖は中空、而して中に純白綿狀の菌絲を條狀に充滿して居る。褶は莖に隔生する。全体が乾燥し易くて少しも粘質がない明瞭な鏢を有するのが一特徴で且つ此の鏢は巨大で徑約 2—4 cm ある。鏢の上表面は純白色、下部はやゝ褐色がかつて居る。鏢は莖からた易くその莖との接着部を離れさすことが出来、その輪状のまゝ、莖に沿つて上下に動かし得る。形が傘に似て居て、一見したら容易に忘れることはあるまいと思はれる菌である。

#### コベニタケ *Russula fragilis* (Pers.) Fr.

本菌は、蓋の表面が鮮紅色であるが中には褪色したものがある。殊に降雨後には大部のものが殆ど褪色して白くなりかけて居る。幼時は蓋は半圓球、後には扁平となる。更に後には蓋の周縁が上方に少し反轉するやうになるものが多い。中央部が皿狀に窪んで居る。褶は色は雪白であつて密生して居る。莖も白色。全体が脆い、莖の徑 2—6 cm 莖の徑 7—16 cm 莖の長さ 2.5—6 cm あつた。褶は莖に離生し、莖の中心部は微小な孔隙多く微褐色を呈する。胞子は球狀で白色、小さな棘を表面に生じて居る。昭和九年九月二十九日、宮崎市下北方町の林中、松樹の下で本菌を多数採集した。

## 植物の花器の發達と分化に就て

松原茂樹

花器の發生に就ては既に幾多の研究ありて、茲に今更専門外の私共の問題とするに足らないが、私は農業上關係あるものに就ての業績を紹介し、又私の考へも述べて見度い。

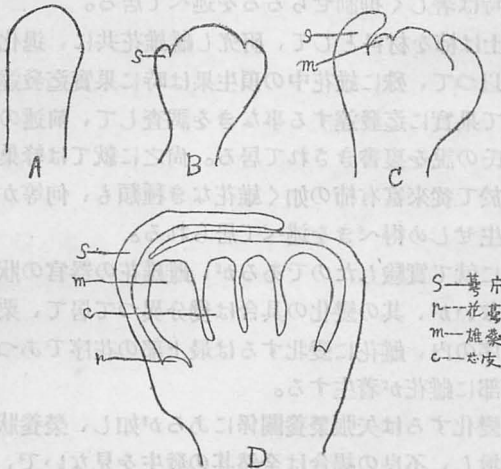
1. 花器の發達の順序、之に就ては從來より種々の説もあり、又業績も多いが一般に認められて居るのは、先ず萼片輪より始り、次第に花瓣輪雄蕊輪、心皮輪に及ぶを原則とされて居る。

されど之に反するものも尠くない、例へばばら屬にては雄蕊が心皮に遅れ、菊科にては雄蕊、心皮、萼片、花瓣の順であるが如しである。

未だ此の外にも尠からず之に類するものがあれば、今俄に確と其の順次を決定するが如きは、甚だ早計であらねばならない。只以上は現今に於ける一つの方向を示したのに過ぎない。

次に其の發達の順序を圖示する。

ナズナの花の各要素の發達を示す (Coulter氏)



### 2. 雌雄異花と同花

被子植物の大部分は雌雄同花であるが、稀に異花のものもある。又裸子植物の大部分は異花であつて同花のものは尠い。

農業上關係の深い被子植物にありては、何れから變化せるものである

か、未だ定説がない。

大体に於て雌雄異花が同花より導かれたものと考へらるる場合が多い其の例として Goefel 等は桑、麻、あけび、たかねまんてま等には雌花に雄蕊の痕跡を、雄花に雌蕊の痕跡と認める事を以つてして居る。而しての其の發達の途中に之等の花の雌雄蕊何れかが、退化して異花を呈するものとされて居る。

而し之は一の假説として植物學者の間には前述の様は何等の定説がない、本邦形態學の權威である、小倉謙博士なども、以上を一つの假説とされて居る様である。

然るに之が農業上の二、三の問題に就て研究されたものを見ると相當肯定されないでもない様に思はれる。

A. 郡場博士は、植物の花の不稔性の要素の一つとして器官の分化の初期及其の後の場所及空間の不足を擧げて居られる、即ち環境に依りて兩分の變化の起るものである事を擧げられて居る。

B. Gardeuer 氏は苺を材料とし、Smith 氏は茄を用ひて研究し、花器の發達を研究して榮養物質の不足は雄花の發達到何等の差支ないが、雌花の發達には著しきを述べ、雌花の發達には目立つて榮養物質の多きを要し、少き時は著しく抑制せらるるを述べて居る。

C. 並河博士は柿を材料として、研究し雌雄花共に、退化せる器官を有して居る事以つて、殊に雄花中の頂生果は時に果實迄發達するも、側生果は決して果實に迄發達する事なきを調査して、前述の Smith, Gardener 兩氏の説を裏書きされて居る。尙之に就ては蜂巢技師も柿の花芽の研究に於て從來富有柿の如く雄花なき種類も、何等かの方法に依りて雄花を着生せしめ得べきを述べて居られる。

D. 私は栗に就て實驗したのであるが、雌雄花の器官の状態は並河氏の場合と大差ないが、其の變化の具合は幾分異つて居て、栗樹にありては、多數の花序の内、雌花に變北するは最上部の花序であつて、而も其の花蒂の最基部に雌花が着生する。

其の雌花に變化するは矢張榮養關係にあるが如し、榮養状態良好の時は雌花の數を増し、不良の場合は全然其の發生を見ないで、雄花のみで終る。

E. Shahurt 氏は Peacan を用ひて實驗し、雌花の着生する場所に、其の發生期に於て何等かの障害のため發生せざる時は、其の下の雄花が雌花を生ずる事あるを報告して居る。之は必ずしも以上の例とは一致し



ないが、矢張或程度迄環境又は榮養作用に依るものである事を示すものとしてよい。

以上の實驗を綜合して見ると農業上の問題の多くは、何れも其の最初は雌雄同体で、その途中に於て何れかに分れる Goebell の説に従つてもよいと思れる。

然るに植物系統學者の隱花植物より發生學上の諸例より大小孢子葉即ち雌雄蕊の分化が行はれば同体の花を生じ、次で異花に分化するもので其の分化の行程を見るに一は同種の孢子葉の排列上の分化、一はいつれかの孢子葉の退化に因るものとされて居る。

次に尙茲に注目すべきは、雌雄異体の種類に於て雌体と雄体との細胞に性染色体の認めらるる事であつて、此の事實は最初 Henkiny が昆虫類にて認め、其の後動植物共に相當多數に亘りて研究され、本邦にありては木原、篠達兩博士の植物に於ける貴重な文獻が發表されて居る。

此の性染色体かが、雌雄別を引起すものである事は上記細胞學者の認める所であるが、左様なれば、既に其の個体の發生當時に當りて既に決定せるものであつて、此の種の説に従へば上記の形態學者の説は相反する事となるを以つて、此の點尙今後の研究に俟つと共に、應用農學上甚だ重要な問題と稱せねばならない。

## 日向沿岸漂着植物

日 高 醇

現在まで南方熱帯地方産の植物又は動物が黒潮に載せられて漂着する事は、殊に暴風の際に、此の地方の沿岸に打寄せられる事は植物に於てはココヤシ、ゴバンノアシ等の果實が知られ動物ではイヒジマウミヘビカツラドリ等の熱帯産のものが捕獲された。筆者は1932年12月より1934年7月までの間に於て前後6回に亘つて、宮崎縣宮崎市一ツ葉濱より、宮崎郡廣瀬村一ツ瀬川河口に至る間を踏査し、採集調査して得たものを報告して参考に供したいと思ふ。

### 1. ココヤシの果實

1932年12月3日果皮破片の1個（一ツ葉濱）1933年5月6日果實の切半されたもの1個（一ツ葉濱）、1933年7月6日果皮の破片2個（廣瀬村海岸）の4個を採集して居る。ココヤシは學名を *Cocos nucifera* LIN. と稱するもので、栽培は沖繩の諸島にも行はれて居るが栽培であるから黒潮に乗るやうな場所にはないらしい、又臺灣本島でもかゝる所は見當らない。それでもつて南方諸島のもので我委任統治領邊から流れて來たものと思はれる。筆著の採集品の外現在存するものは青島の植物園の入口の棚に載つて居る完全なものがある。あれは青島に漂着したものであると言ふ事である。

### 2. タコノキの幹

1932年12月3日一ツ葉濱約1里の海岸に於て、4本を認め、又1933年9月3日、一ツ葉より一ツ瀬川の間にて3本を發見して居る。採集したものは宮崎高農に殆んど完全なもの1本、著者1本、少し焼けたものを1本遠藤茂助教授が所有して居られる。又先年は葉の青い儘のものが青島に漂着したと言ふ事である。漁師に名稱を問へば或ひは青島にあるやうなビラウと云ひ、又或ひは南洋に産するシュロであらうと言ふ。暴風の後は余程多く漂着するらしく漁師等の話では大抵薪木とするらしい。タコノキは學名を *Pandanus boninensis* Warburg と言つて純熱帯植物である、沖繩は殆んどなく、臺灣以南の諸島に多いものである。殊に南洋諸島の海岸又は濕地に多く、葉に鋭鋸齒を有して幹は枝を岐ち、葉から纖維を採る種類もあるが極めて厄介な植物で群生すれば焼拂ふより仕方がない。海濱で焼捨てられた植物が多く漂着する事は自然の事であらう。

### 3. ゴバンノアシの果實

1932年12月4日果皮2個（一ツ葉濱）1933年1月22日果實1個（住吉濱）を採集して居る。筆者の採集品の外に約10年前、前宮崎中學校教諭井上俊次郎氏が一ツ葉濱にて採集されたものが宮崎中學校博物標本室に保存されて居る。ゴバンノアシは學名を *Barringtonia speciosa* FORST. と言ふもので沖繩縣島尻島、石垣島等より以南の植物で、熱帯性であるが臺灣、印度、馬來、南洋諸島に多い。果實は有毒であると言ふ。果實は四角形で倒さにした形はよく基盤の脚に似て居るのでこの名がある。果皮がココヤシの果皮に似た性質を有して輕鬆であるからよく海水に浮く

#### 4. モダマの種子

1934年10月17日採集したものである。(一ツ瀬川河口)。筆者の採集の外、採集期日は不明であるが兒湯郡富田小學校に富田村日置海岸で採集された種子を含んだ莢の完全なものがある。モダマは學名を *Entada Scundens* BENTH と言ふもので沖繩縣石垣島以南の土地に産する、上昇性の灌木である。種子は黒色で圓形をなして居る大きさは1寸5分位ある

#### 5. ビラウの幹

1932年12月3日、長さ 2.20m 餘、直徑 0.25m の大きさを有して兩端は折れたらしいものを採集し、大部分は筆者が所有して居るが、一部は遠藤助教授の下にある。1932年12月24日には薪木にされた残りらしく炭が附着して居るものを採集した。大きさは長さ 0.60m 巾 0.15m 位で板にされたものであつた。ビラウとは學名を *Libistona chinensis* R. BR. と言ふもので、日本内地は宮崎縣宮崎郡青島を初めとして諸所にあるが、さう度々海流にも載せられさうな状態を呈して居る所は内地は勿論、臺灣にも野生は見當らないとの事であるから、流出の發源地は恐らく南洋諸島であらう。ビラウ其他の植物が漂着する爲めに青島のビラウまでが海流による漂着説が唱へられるがビラウの果實は海水には沈下するものであるから、現在の青島のビラウは漂着したものではない事は確實である

## 宮崎菌類雜記 (六)

### 遠藤 茂

#### 28. ヤマブシタケ *Hydnum erinaceus* (Bull.) Fr.

本茸は一名ハリセンボンと稱し、白色の塊状をなし樹幹に懸垂し、その末端は多數の針となり恰も簞状の外観を呈する。

昭和 8年10月15日、日高醇氏が宮崎縣東諸縣郡綾町中尾官林でイチヒガシ上で採集した標本につき筆者が調査した結果によればその生重量は 41.2gr で、針の長さは 1.9cm 胞子は無色、球状をなし 5.7—6.175×4.75—5.7ミクロン 普通 5.7×4.75ミクロン の大きさを有するものが多い。

又、昭和 8年11月26日に矢張り日高醇氏が宮崎縣東諸縣郡釋迦岳で採

集したものは針の長さは 2.0—2.9cm で、胞子は無色、球状をなし、  
 5.7—7.6×4.3—5.7ミクロンである。針の長さに於て多少前記標本と異なるが、その他の形態、胞子等の主要な點に一致するので同一種と認める  
 宮崎縣に於て本茸の採集を記録されたものは無いが、ただ一つ川村清一博士がその著「日本菌類圖説」に於て鹿児島東臼杵郡にて椎樹に生じたものを所持する旨を記してゐる。この東臼杵郡は宮崎縣東臼杵郡のことであるまいか。若し然りとせば筆者の調査に先立つて既に宮崎縣にて採集せられたことになる。

本茸は食用茸ではあるが宮崎縣下では之れを食用に供してゐるものは今日迄ない。

### 29. マツオフジ *Lentinus lepideus* Fr.

本茸は松樹及び松材の腐朽したものに生ずる食用茸である。蓋は地色は白色で稍々淡黄色を帯び、多くの褐色の鱗被を有する。形は扁平で稍山形のものであるが、よく不規則の波状を呈したり、又中央部が凹んだり、或は裂目を生ずることがある。

筆者は昭和 8年11月12日、宮崎縣宮崎郡双石山で松樹に寄生したものを吉江清朗氏の採集したもの、昭和 8年 7月21日、日野巖教授が宮崎縣宮崎市宮崎神宮境内の松に寄生してゐるのを採集せられたもの、昭和 8年11月 2日、宮崎市天神山で松の根元に寄生してゐるのを日高醇氏の採集せるもの、昭和 9年 5月27日、尾鈴山にて原田徹氏の採集せる標本を有するが、是等の標本は其の形態が種々極めて變異に富むものである。今是等標本の二三に就き記するに、先づ吉江氏が双石山で採集したものは三個叢生したもので、その中二個は稍山形をなしてゐるが一個は裂目があり波状をなしてゐる。日野教授の採集品は非常に白味が強く、形を貝殻状を呈し、莖も一側に附着し蓋の大きさは 4.5×4.0 cm である。日高醇氏の採集品は稍圓形をなしてゐるが、中央部は凹み且つ裂目を有し波状をなしてゐる。莖は短く、表面には褐色の鱗被を有する。褶は白色で比較的厚く裂け易く、横に條がある。縁は鋸齒状を呈する。

### 30. カンゾウタケ *Fistulina hepatica* (Huds.) Fr.

本茸はその形が肝臓に似てゐるもので、主に椎、栗、櫻等の樹幹に生ずるものである。初めは赤色であるが次第に老成するに従つて闇赤色、チョコレート色となる。

筆者は昭和 8年 4月23日 吉江清朗氏が宮崎縣双石山で採集した標本

を有するが、この標本を翌日調査した結果はその形が上記のやうに肝臓形をなし、長さ 11.5cm 幅 10.5cm でその生重量は 21.5gr であつた。

宮崎縣に於ては未だその發生を報告されたものがないので恐らく本記録がその最初のものと考えらる。

本茸は一見毒々しいものであるが、頗る美味な茸である。宮崎縣下では筆者の調査範圍に於ては食用に供されてゐない。

### 31. ハナハハキタケ *Clavaria formosa* (Pers.) Fr.

本茸はハハキタケ (*Clavaria botrytis*) によく似た茸で大きな株となる食用茸である。その形は多くの細枝を出して分岐するため繖状をなすものである。

本茸は宮崎縣下には極めて多いものであるが、宮崎縣東諸縣郡綾町中尾官林で、昭和 8年10月15日に日高醇氏の採集した標本につきて筆者の調査した結果によれば、この茸は帶黃紅色をなし、よく分岐し、その高さは 10.9—11.8cm で主幹の直径は 1.6—2.3cm その一株の重さは 38.5gr であつた。胞子は白色で長橢圓形をなし、その大きさは 8.55—11.4×4.28—5.7ミクロン、普通 9.5×5.7ミクロンのものが最も多い。

宮崎市内の八百屋の店頭には本茸を見るが百匁約10錢位の價である。

### 32. ヌメリツバタケ *Armillaria mucida* Schrad.

本茸は其學名を *Armillaria mucid* Schrad と稱し、*Agaricus mucidus* Schrad., *Agaricus Valens* Scop., *Agaricus nitidus*. *Agaricus Splendens*, *Agaricus Olivaceofuscus*, *Agaricus sudans* Wallr., *Armillaria mucida* Fr., *Armillaria mucida* Quel., *Collybia mucida* Ricken, *Mucidula mucida* (Schrad.) V. H.

等の多數の異名を有する。

本茸は今井三子氏が北海道に産することを明かにし、ヌメリツバタケの名を與へたもので、後ち松浦勇氏はこれを島根縣松江市及び鳥取縣鳥取市に於て採集し報告してゐる。本邦に於てはこの外に産地は知られてゐなかつたが、昭和 8年10月16日、宮崎縣東諸縣郡綾町字南俣で潤葉樹の朽木に於て、又同年11月27日に宮崎縣東諸縣郡八代村の釋迦岳で潤葉樹の朽木で日高醇氏が採集し、筆者に呈示された。これによつて初めて南九州にも産することが明かとなつたがこの事は昭和 9年 4月發行の植物及動物、第2卷、第4號に記しておいた。

今上記、宮崎縣産の材料により筆者が調査した結果によると菌傘は  $5.5-13 \times 5.2-10\text{cm}$  で最初は半圓形であるが、次第に圓錐形となり遂には殆んご平面をなすやうになる。色は殆んご白色であるが、多少淡黄色に着色することがある。肉は白色である

菌褶は白色で着生するか或は多少垂生し、廣くて各褶間の距離は大である。

菌柄は  $3.4-8.0\text{cm}$  の長さで、その直徑は  $0.45-0.8\text{cm}$  あり彎曲する菌柄の色は上部は白色であるが下部は暗黄色である。

下環帶は普通よく發達し、膜質で白色であるが、時には菌傘及び菌柄の下部と同色のこともある。

擔子柄は  $57.5-66.13 \times 17.25-27.75$  ミクロンで、4個の孢子を有する孢子は白色で  $19.0-21.85 \times 15.2-180.5$  ミクロンである。

本茸は宮崎縣東諸縣郡綾町及び東諸縣郡八代村では菌傘の上皮を剥いて後ち食用に供するが主に吸物等に入れて用ふる。

### 33. タマゴタケ *Amanita Caesarea* Pers.

本茸は歐米に於ては珍重される食用菌で、我國に於ては長野縣下に於てよく産し食用に供されてゐる。

安田篤氏は植物學雜誌、第34卷、第68頁に於て報告されてゐるが、同氏は信濃國西築摩郡木曾福島町の林地土上に生じたるものを大正8年8月12日に採集、又仙臺林地土上に生じたものを大正8年10月17日に採集せられてゐる。同氏は菌傘の表面は橙黄色或は赤色としてゐるので上記の採集品が黄色のものか赤色のものか明かでない。又川村清一博士も黄色のものも赤色のものも共に同一種と認定し *Amanita Caesarea* Pers. となし、赤色のものはその著日本菌類圖説第238圖に於て明治43年10月30日に長野縣上水内郡高岡村で採集したものを圖示し、黄色のものは同書の229圖に昭和3年7月13日、千葉縣松戸附近で採集したものを圖示されてゐる。

九州殊に南九州に於ては黄色のもの、赤色のもの共に産するか否か全く不明で今日迄之れに關して何等記録されたものがない。然るに昭和9年9月23日、本校重松義教授は霧島山の新湯附近に於て一茸を採集し筆者に呈示せられたがこれは正しくタマゴタケの赤色のものに外ならないこれによつて南九州にも産することが明かとなつた。筆者は黄色のものと赤色のものとが果して同一種なりや否やに關しては疑問を抱くもので

ある。恐らく別種とすべきものと考えてゐるが未だ充分の資料を有しないので茲では従來の慣用に従ひこの赤色のものに上記の學名を採用して置く。

上記の重松教授の採集材料によつて記載すると次のやうである。

形は半球形で蓋の高さは 3 cm 表面は鮮麗な赤朱色で周縁部は僅に淡色となり、條を有する。表面は滑かで光澤がある。

繖は濃黄色で内部は黄白色である。菌柄は黄色でその長さは 8 cm 徑 1 cm で上部は細る。中空で内部は綿狀の白色の菌絲よりなり處々空所がある。

鏢は大きな膜狀で蓋の着生部より約 2.5 cm の部にあるが下方が廣くなつてゐる。この鏢には無数の條がある。

菌柄の下部には脚苞を有するが、白色大形で、その徑は 3 cm 長さは 4.5 cm である。

胞子は無色で殆んど圓形をなし、徑 5.7-8.8  $\mu$  ある。

## 屋久島植物目録

大 村 勇

此の植物目録は筆者が昭和九年八月三十日より九月十四日迄下屋久島營林署に實務見習の爲滞在中に採集せる植物中名稱の分明せるものを列擧せるものである。尙ほ植物名檢索に當り多大なる御教示を賜りたる下屋久島營林署の小田氏、本校の宮澤、遠藤兩先生に對し、茲に明記して謝意を表す。

### き く 科

ヨナメ。ヨモギ。ツハブキ。ヂシバリ。ヤクシサウ。フジバカマ。チハコグサ。ハコグサ。△クジヤクサウ。カンツハブキ。ガンクビサウ。ヤブタビラコ。センダングサ。ホソバハグマ。テンデクボタン。ウスベニニガナ。ヤクシマアザミ。キツコウハグマ。アキノキリンサウ。イツシンクハ。ヤクシマコウモリサウ。クマノギク。

## ばら科

△ウメ。 △モモ。 △ビハ。 キイチゴ。 ノイバラ。 フユイチゴ。  
 バライチゴ。 クマイチゴ。 バクチノキ。 △ヨシノザクラ。 キンミヅヒ  
 キ。 シヤリンバイ。 ナハシロイチゴ。 ホウロクイチゴ。 カマツカ。 ナ  
 カマド。 ツチグリヤマザクラ。

## まんさく科

イスノキ。

## ゆきのした科

△アヂサイ。 ノリウツギ。 イハガラミ。 ツルデマリ。 ウチハバダイモ  
 ンジサウ。 シマコンテリギ。

## もうせんごけ科

モウセンゴケ。

## なたね科

△ダイコン。 イヌタガラシ。

## ふうちようさう科

ギョボク。

## くすのき科

クスノキ。 タブノキ。 カゴノキ。 イヌガシ。 ヤブニツケイ。 カナクギノ  
 キ。 バリバリノキ。

## もくれん科

シキミ。 サネカヅラ。

## つづらふじ科

ハスノハカヅラ。 アチツヅラフジ。 オホツヅラフジ。 カウシウウヤク。

## めぎ科

△ナンテン。

## あけび科

ムベ。

## うまのあしがた科

センニンサウ。 ヤクシマカラマツ。

## やまぐるま科

ヤマグルマ。



## むらさき科

チシヤノキ。

## かがいも科

タウワタ。サクララン。イヨカヅラ。キジヨラン。

## けふちくたう科

テイカカヅラ。サカキカヅラ。

## りんどう科

ツルリンダウ。ヤクシマリンダウ。ヘツカリンダウ。

## ふどうつぎ科

ウラジロフヂウツギ。

## もくせい科

ヒ、ラギ。ネズミモチ。

## えごのき科

エゴノキ。

## はいのき科

ハイノキ。クロバイ。ミミツバイ。タンナサハフタギ。

## かきのき科

トキハガキ。

## いそまつ科

イツマツ。

## さくらさう科

モロコシサウ。

## まんりよう科

マンリヨウ。ヤブコウジ。カラタチバナ。モクタチバナ。イツセンリヨウ。タイミンタチバナ。

## いはかがみ科

ヒメイハカガミ。

## しやくなひ科

サツキ。アセビ。ヒカゲツツジ。シヤンヤンポ。サクラツツジ。アクシバモドキ。ツクシシヤクナゲ。ヤクシマシヤクナゲ。

## りやうぶ科

リヤウブ。

## みづき科

ヤマボウシ。

## せり科

ツクシゼリ。ボタンボウフウ。

## うこぎ科

キヅタ。フカノキ。タラノキ。カクレミノ。ミヤコダラ。

## のほたん科

クサノボタン。

## ざくろ科

△ザクロ。バンジロ。フトモモ。

## みそはぎ科

サルスベリ。

## ぐみ科

アキグミ。アツバノマルグミ。ツルグミ。

## ちんちようけ科

コガンピ。シヤクナンガンピ。コセウノキ。

## さほてん科

△サボテン。△カニサボテン。

## すみれ科

スミレ。タチツボスミレ。ヤクシマスミレ。

## おとぎりさう科

オトギリサウ。ミヤマコケオトギリ。

## さざんくわ科

チヤ。サカキ。ヒサカキ。モツコク。ヤブツバキ。サザンクワ。ヒメシヤラ。ヒメヒサカキ。ハマヒサカキ。ヒコサンヒメシヤラ。

## さるなし科

ナシカズラ。

## ぜにあふひ科

△ムクゲ。フヨウ。オホボンテンクワ。

## ほるとのき科

コバンモチノキ。

## ぶさう科

ツタ。エビヅル。ノブドウ。ウドカヅラ。サンカクヅル。

## くろうめもぎき科

クマヤナギ。

## ほうせんくわ科

△ホウセンクワ。

## あをかづら科

ヤマビハ。

## かへで科

シマウリカヘデ。コバウチハカヘデ。

## みつばうつぎ科

ゴンズイ。

## にしきぎ科

クロヅル。モクレイシ。アヲツリバナ。ツルウメモドキ。

## もちのき科

ツゲ。ソヨゴ。モチノキ。ナメノキ。クロガネモチ。ツクシイヌツゲ

## うるし科

ヌルデ。ハゼノキ。

## たかとうだい科

シラキ。ユヅリハ。エノキグサ。カンコノキ。アブラギリ。コミカンサウ。アカメガシハ。ヒメユヅリハ。アヲヂクユヅリハ。

## せんだん科

センダン。

## さんしょう科

△ザボン。 △キンカン。 サンショウ。 イヌザンショウ。 ミヤマシキミ。 カラスザンショウ。

## かたばみ科

カタバミ。 ミヤマカタバミ。

## ふうろさう科

△テンヂクアフイ。 ヤクシマフウロサウ。

## まめ科

△クズ。 ハブサウ。 ヌスビトハギ。 ハカマカヅラ。 ハマナタマメ。 カハラケツメイ。

## とべら科

トペラ。

## ばら科

△ウメ。 △モモ。 △ビハ。 キイチゴ。 ノイバラ。 フユイチゴ。 △バライチゴ。 クマイチゴ。 バクチノキ。 △ヨシノザクラ。 キンミヅヒキ。 シヤリンバイ。 ナハシロイチゴ。 ホウロクイチゴ。 カマツカ。 ナハカマド。 ツチグリヤマザクラ。

## まんさく科

イスノキ。

## ゆきのした科

△アヂサイ。 ノリウツギ。 イハガラミ。 ツルデマリ。 ウチハバダイモンジサウ。 シマコンテリギ。

## もうせんごけ科

モウセンゴケ。

## なたね科

△ダイコン。 イヌタガラシ。

## ふうちようさう科

ギョボク。

## くすのき科

クスノキ。 タブノキ。 カゴノキ。 イヌガシ。 ヤブニツケイ。 カナクギノキ。 バリバリノキ。

## もくれん科

シキミ。 サネカヅラ。

## つづらふじ科

ハスノハカヅラ。 アヲツヅラフジ。 オホツヅラフジ。 カウシウウヤク。

## めぎ科

△ナンテン。

## あけび科

ムベ。

## うまのあしがた科

センニンサウ。 ヤクシマカラマツ。

## やまぐるま科

ヤマグルマ。

すべりひゆ科

スベリヒユ。

おしろいばな科

オシロイバナ。

ひゆ科

ヒユ。ケイトウ。イノコヅチ

で科

△ソバ。イヌタデ。ギシギシ。ツルソバ。ミヅヒキ。

うまのすずくさ科

ウマノスズクサ。

つちとりもち科

ツチトリモチ。

やさりぎ科

オホバヤドリギ。

いらくさ科

キミズ。ヤブマテ。ハドノキ。ヤナギイチゴ。

くわ科

アコウ。イタビ。イヌビハ。ガジマル。ヤマクハ。オホイタビ。ヒメイタビ。ホリバナイヌビハ。

にれ科

ウラジロエノキ。

かしは科

クリ。イタジイ。アカガシ。ウバメガシ。ツブラシイ。マテバシイ。  
ウラジロガシ。

かばのき科

アカシデ。ヤシヤブシ。ヤマハンノキ。オホバヤシヤブシ。

やまも科

ヤマモモ。

やまもがし科

ヤマモガシ。

やなぎ科

△アメリカヤマナラシ。

## ちやらん科

チヤラン。センリヨウ。

## こせう科

フウトウカヅラ。

## らん科

セキコク。ムギラン。フウラン。シカンラン。ナゴラン。シュンラン。  
ヤクシマシユスラン。ヤクシマホウサイラン。ツリシユスラン。

## めうが科

△シヨウガ。 ハナミヨウガ。

## ばしょう科

△バナナ。 △マニラアサ。

## やまのいも科

ヤマノイモ。

## すいせん科

ハマオモト。 ナツズイセン。 キツネノカミソリ。 アタリウゼツラン。

## ゆり科

△オモト。 ハラン。 ツルボ。 ヤブラン。 ノギラン。 △タマネギ。  
△ラツキヨ。 ジヤノヒゲ。 ヒメカガラ。 オリヅルラン。 マイヅルサウ  
キキヨウラン。 シライトサウ。 サルトリイバラ。 クサスギカヅラ。 イハ  
ゼキシヨウ。 チヤボホトトギス。

## みずあふい科

ホテイサウ。

## つゆくさ科

ツユクサ。

## あななす科

△バインナツブル。

## てんなんしょう科

△サトイモ。 マムシグサ。 クハズイモ。 セキシヨウ。

## しゆる科

シユロ。 シユロチク。 △カンノンチク。

## かやつりくさ科

ヒメクグ。

## くわほん科

△イネ。△アハ。△キビ。シバ。マダケ。ススキ。チガヤ。ササ  
クサ。アシボリ。  
ダンチク。ニハホコリ。△サトウキビ。チカラグサ。ジュズタマ。  
チヂミザサ。ヤクシマザサ。△トウモロコシ。トキハススキ。エノコ  
ログサ。スズメノヒエ。

## まつ科

スギ。ヒノキ。ツガ。モミ。クロマツ。ビヤクシン。

## いちる科

カヤ。ナギ。イヌマキ。イヌガヤ。

## そてつ科

△ソテツ。

## いはひば科

カタヒバ。アヲミゾカタヒバ。

## まつばらん科

△マツバラシ。

## ひかけのかづら科

ミズスギ。マンネンスギ。ヒカゲノカヅラ。ホリバトウゲシバ。タカネ  
ヒカゲノカヅラ。

## かにくさ科

カニクサ。

## ぜんまい科

ゼンマイ。シロヤマゼンマイ。

## うらじろ科

ウラジロ。コシダ。

## へご科

ヘゴ。

## うらほし科

シノブ。ワラビ。マメツタ。シシラン。ミゾシダ。ヒトツバ。タマシダ  
アツイタ。ヘラシダ。ナチシダ。タチシノブ。シシガシラ。ペニシダ。  
クリハラン。ホウビシダ。イシカグマ。ヤマソテツ。ヒノキシダ。イタ  
チシダ。クルマシダ。カナワラビ。クマワラビ。ノキシノブ。スジヒト

ツバ。ユノミネシダ。アマクサシダ。ホングウシダ。キノボリシダ。ヌカボシラン。オホタニワタリ。キンモウイノデ。イハヤナギシダ。ヒメハシゴシダ。オホイハヒトデ。ハチジヨウシダ。ツヤナシイノデ。イハセメワラビ。オホキジノラシダ。タカノハウラボシ。ヤリノホクリハラシ。オホアマクサシダ。ホリバノカナワラビ。ヒメタカノハウラボシ。エダウチホングウシダ。ギジノラシダ。ホラシノブ。シマアヲネカヅラ

りうびんたい科

リウビンタイ。

こけしのぶ科

ツルホラゴケ。ウチハゴケ。

「△印は植栽せるもの」

## 本庄町附近採集植物目録 (二)

### 後 藤 弘

Polypodiaceae うらほし科

オサシダ、平原山、カウザキシダ、石峯、トラノラシダ、平原山、ヘラシダ、平原山、宮尾丸、ノコギリシダ、石峯、ゲジゲジシダ、平原山、ハシゴシダ、平原山、マメヅタ、平原山、イヌシダ、平原山、ホラシノブ、平原山、タチシノブ、石峯、ミツデウラボシ、平原山、オニヤブソテツ、石峯、オホバノキノモトサウ、宮王丸、キノモトサウ、石峯、アマクサシダ、石峯、宮王丸、須志田、コモチシダ、平原山。

Gleicheniaceae うらじろ科

コシダ、宮王丸、ウラジロ、平原山

Sohizaeaceae ふさしだ科

カニクサ、平原山、石峯

Osmundaceae ぜんまい科

ゼンマイ、宮王丸、平原山

Equisetaceae とくさ科



スギナ、平原山

Lycopodiaceae ひかけのかつら科

ヒカゲノカヅラ、平原山、タウゲシバ、平原山

Selaginellaceae いはひば科

カタヒバ、石峯、タチクラマゴケ、宮王丸、平原山

Pinaceae まつ科

ヒノキ、平原山

Saururaceae はんけしやう科

ドクダミ、平原山、宮王丸

Piperaceae こせう科

フウタウカヅラ、石峯、宮王丸

Fayaceae ぶな科

イチキガシ、平原山、ナラバガシ、平原山、宮王丸、マテバシヒ、平原山、オホミヅナラ、平原山、クリ、石峯、平原山、宮王丸

Ulmaceae にれ科

エノキ、平原山

Urticaceae いらくさ科

ユアカソ、須志田

Santalaceae びやくだん科

カナビキサウ、平原山

Polygonaceae たで科

イタドリ、須志田、シロイヌタデ、飯盛、イヌタデ、飯盛、ミヅヒキグサ、飯盛、宮王丸

Amarantaceae ひゆ科

イヌビユ、飯盛

Caryophyllaceae なでしこ科

ツメグサ、飯盛

Ranunculaceae うまのあしがた科

センニンサウ、須志田

Lardizabalaceae あけび科

ムベ、宮王丸、平原山

## Menispermaceae つづらふじ科

ハスノハカヅラ、石峯

## Magnoliaceae もくれん科

シキミ、宮王丸、ビナンカヅラ、平原山、石峯

## Lauraceae

クスノキ、平原山、タブノキ、平原山、アヲカゴノキ、宮王丸、ヤブニクケイ、宮王丸、ホソバタブ、宮王丸

## Cruciferae あぶらな科

ナヅナ、平原山

## Rosaceae いばら科

ヤマビハ、宮王丸、キンミヅヒキ、須志田、ノイバラ、宮王丸、テリハノイバラ、宮王丸、フユイチゴ、平原山、宮王丸

## Leguminosae まめ科

ミヤマハギ、石峯、イヌハギ、石峯、タヌキマメ、平原山、カハラケツメイ、須志田、ヤハズサウ、平原山、宮王丸、ノアヅキ、須志田、クサネム、須志田、宮王丸、ネコハギ、平原山、宮王丸、ナツフヂ、平原山

## Geraniaceae ふうろさう科

ふうろさう、平原山、飯盛

## Oxalidaceae かたばみ科

カタバミ、平原山、ハナカタバミ、飯盛

## Euphorbiaceae たかとうだい科

コミカンサウ、飯盛、ニシキサウ、飯盛

## Vitaceae ぶどう科

ナツヅタ、平原山、エビヅル、平原山

## Molvaceae あふひ科

ムクゲ、平原山

## Theaceae つばき科

ツバキ、宮王丸、ヤマチャ、宮王丸、平原山、ヒサカキ、平原山

## Guttiferae おとぎりさう科

ヒメオトギリサウ、平原山、オトギリサウ、平原山

## Violaceae すみれ科

- スミレ、平原山、コスミレ、石峯、宮王丸  
 Elaeagnaceae くみ科  
 ナハシログミ、平原山、宮王丸  
 Melastomatataceae のほたん科  
 ヒメノボタン、須志田、平原山  
 Araliaceae うこぎ科  
 ヤツデ、宮王丸  
 Umbelliferae せり科  
 ツボクサ、平原山、オホバノチドメグサ、平原山、チドメグサ、飯盛、  
 宮王丸、シラネセンキウ、平原山、須志田、宮王丸  
 Cornaceae みつき科  
 アヲキ、宮王丸  
 Pirolaceae いちやくさう科  
 イチヤクサウ、平原山  
 Myrsinaceae やぶかうじ科  
 マンリヤウ、宮王丸、石峯、イヅセンリヤウ、宮王丸、ツルカウジ、宮  
 王丸、ヤブカウジ、平原山  
 Primulaceae さくらさう科  
 ヌマトラノヲ、平原山  
 Symplocaceae はいのき科  
 サハフタギ、平原山  
 Oleaceae ひひらぎ科  
 ネズミモチ、宮王丸、平原山  
 Asclepidaceae たうわた科  
 カモメヅル、宮王丸  
 Borraginaceae むらさき科  
 ハナイバナ、飯盛  
 Labiatae しんけい科  
 ナツノタムラサウ、平原山、須志田、ヂゴクノカマノフタ、平原山、飯  
 盛、宮王丸、ヒキオコシ、平原山、ウツボグサ、平原山  
 Scrophulariaceae ごまのはぐさ科

ウリクサ、飯盛、ホソバルリトラノヲ、平原山

Orobanchaceae はまうつほ科

ナンバンギセル、平原山

Acanthaceae きつねのみご科

キツネノマゴ、飯盛、宮王丸

Plantaginaceae おほぼこ科

オホバコ、飯盛

Rubiaceae あかね科

カギカヅラ、平原山、クチナシ、平原山、宮王丸、シラタマカヅラ、平原山

Caprifoliaceae すいかづら科

ニンダウ、宮王丸、ガマズミ、平原山

Valerianaceae をみなへし科

ヲミナヘシ、平原山

Compositae きく科

ヒヨドリバナ、平原山、ヒメガンクビサウ、平原山、チチコグサ、平原山、宮王丸、ガンクビサウ、平原山、ヤブタビラコ、須志田、タカサブラウ、須志田、ノアザミ、平原山、オケラ、平原山、フデバカマ、平原山

Alismataceae おもだか科

オモダカ、須志田

Gramineae かほん科

イタチガヤ、平原山、スズメノヒエ、飯盛、ヤダケ、平原山、マダケ、宮王丸、ホウライチク、平原山、ニハホコリ、飯盛、宮王丸、オヒジハ飯盛、スズメノテツバウ、飯盛、ヒエ、平原山、モロコシガヤ、平原山、キンエノコロ、平原山、飯盛、メガルカヤ、平原山

Cyperaceae かやつりぐさ科

タマガヤツリ、石峯、ヒメクグ、飯盛、ヒナガヤツリ、飯盛、アゼガヤツリ、須志田、ノテンツキ、須志田、ヤマキ、須志田、ヒゼリコ、平原山、イガガヤツリ、須志田、テンツキ、飯盛

Commelinaceae つゆくさ科

ツユクサ、平原山、飯盛

Juncaceae りん科  
 寺、平原山、宮王丸

Liliaceae ゆり科  
 ヤブラン、石峯、ノギラン、平原山、シヤウジヤウバカマ、平原山、ジヤノヒゲ、平原山、ツルボ、須志田

Orchidaceae らん科  
 ネヂバナ、平原山、コ克蘭、石峯、宮王丸、ハナメウガ、宮王丸、オホバノトロボサウ、平原山

## 國見岳の植物概観

吉 江 清 朗

私は昭和9年夏熊本營林局植生係宇野氏に伴はれて宮崎熊本兩縣境にある國見岳に登山する事を得たから其の時の事を書いて見たいと思ふ。同山は標高1739米で大体北緯  $32^{\circ}32'30''$ 、東經  $131^{\circ}1'$  の所にあつて全山大原生林で覆れて居る山である。道順に従ひ採集して來た植物を本体として見て來たまゝを書く事にする。

八月十二日早朝一行八名は熊本側の内大臣研伐所を出發致して、兩側にツクバネガシ、サハグルミ、コバチ、ヨグソミネバリ等の茂る林道を経て、愈々登山路にかゝつた。相當大きな溪流を自然の大丸木橋に依つて難なく越せば既に森林は全く原生林となり中に唯一筋の小徑を通づるのみ。溪岸の濕地にはハルトラノチ、カノツメサウ等がカンズゲに混つて居り、更に一溪を横切ればミツバウツギの下にはシロバナエンレイサウが大きな光澤のよい三枚の葉を擴けて早くも樹下は北國の潤葉樹林を思はせ、溪間に生えるカツラは小さなハート型の葉を優美な特徴ある樹冠の上に翻し、サハグルミは長い莖莖花序の果房を垂れて居た。

急坂を攀れば地表はツルアリドホシの赤い實白い花濃緑の葉に覆れ、ミヤマシキミの實は赤く、ハヒノキの小さな葉は微妙に戦ぎ、頭上を見れば今迄の潤葉樹林は一變してツガ、モミを優勢木とする植生となり樹下はスズタケ密生しモミ、ツガの疎立した所にはヒメシヤラの赤褐色の

幹が林内を明くして居る。こんな状態の林相の山腹を暫く進むと小さな澤を幾つも横切る所に出る。

其處は今迄の簡単な植生とは異つて草本が澤山生育繁茂して居る。一般に此の山には濕氣の少し多い所には前述のスズタケは生育して居ない此の小さな澤の附近にはキレンゲシヨウマの大群落が発達して居て、濃綠色の大きな葉の上に黄金の鈴の如き花を着生して居り、其の上を森の妖精かと紛ふばかりのアサギマダラが木の間洩る陽光の下に亂舞して居る。樹木の枝の下と、下の草本階の間の空間それを澤の上から見透せば其の中に亂舞するアサギマダラの姿の美しさ。又其のアサギマダラが人を少しも怖れない爲に筆者達は素手で容易に採集する事を得た。此の附近の谷川の邊にはクロクモサウ、オホヤマハコベ、アザミ類、メタカラサウが出現して居る。澤を離れるとシロモジ、ムシカリ、ノリウツギ、タンナサハフタギ等の灌木の下は皆蘚苔に覆れて居り其の間に混つてユキザサ、スミレサイシン、ミヤマタニタデ、ジンバイサウ等が極めて低い草本階を形成して居る。

再び尾根に出ればモミ、ツガ、イチキとタンナサハフタギ、ムシカリヒメシヤラとスズタケの地帯に出る。此處では既にブナを混淆し其の幹にはタカネマンネングサ(?)ヒメノキシノブ、シンラン、ミヤマノキシノブ、ツタウルシ等が着生登攀して居り、草本階と喬木階とは次第に離れて中間には少數の灌木を生ぜしめるのみで傾斜は相當に緩い。

もう峯も近いと思つて居ると、再び道は山頂を右にして山腹を半廻りして宮崎縣の側へ出て居る。兩側の森林は殆んどブナのみ原生林にしてシナノキ、コバノトネリコ、マンサク、コハウチハカヘデ、ミヅキを混淆しモミ、ツガは全く姿をかくしてしまふ。灌木にはシロモジが大部分を占めてムシカリ、タンナサハフタギ、ノリウツギ、オホヤマレンゲミヤマシグレ、ホシナシミヤマガマヅミ、ミヤマイボタ、ハスノハイチゴ、ヒメシヤラ等。草本階は二、三の物を除いては皆低草であり、ミヤマタニタデ、ミヤマタニソバを除いては殆んど全部が多年性草本でテンエンサウ、Carexsp. ヤマホトトギス、オホモミヂガサ、フタバアフヒクロクモサウ、ルキエフボタン、ユキザサ、ミヤマナルコユリ、ツリバナサウ、アキノキリンサウ、スミレサイシン等があり、又、鬱閉して居ない小徑の兩側にはオホタウヒレン、オホヒナノウスツボ、アハモリシヤウマ、サラシナシヤウマ等がヤマカモジ(?)の間に生え、相當な陽光を欲するメタカラカウが營養不良のやうな色をした淡黄色の花を綴つ

て居る。斯様な所を二、三十分進むと今夜の露营地である小さな開草地に出た。

此處は三十米に十米位の廣さであつて人爲的に伐木した跡地であるか又は初めから木が生育しないのか明瞭でないが、下側はブナ、シナノキの原生林上側は灌木林を以つて明瞭に限られ、南端に近く上の灌木林中に湧水あり、東南向の風衝地ではないが通風の割合によい陽光のよく投射する適湿の草生地であつて特別の草本のみの極盛の状態にある。何故に斯様な大森林地帯にこんな植生が現出して居るのか唯一回の調査に依つてのみで知る事は出来ないが、左様な事が実際にある事であるかはさておき、筆者は次の様に想像する。現在に於ける此の山の道は宮崎側では椎葉、鞆岡に熊本側では濱町、樺木村に通じて居るが、先住民族は其の旅行、移動に必ず稜線を通交し、又此の峯近くで水の得られる地即ち此の草生地に露營したのであらう。現今でも露營する人は絶えぬ様である。而して此の草生地は草本の極盛を示し、周囲の森林は落葉闊葉樹の極盛相を示して居る。そこで少なくとも現在の森林が極盛を示すに至つた植生連続の草本時代の草本即ち國見岳が久住山の如く草原であつた時代の草本の一部が人間の露營する事及びその他の因子に關聯して樹木の侵入を防いで残つて居るのではないかと考へられる。其處の草本に就いて述べれば、クガイサウの群落と芝生其の他二、三の草本に依つて大部分を占められ下方の森林に接した部分にはキレンゲシヨウマ、サラシナシヨウマ等を生じて居る。特記すべきはクガイサウであつて此の草生地の半分以上を占め其の後の大部分は芝生となり、他の草本は非常に數少く前記植物にはさまれて生活して居る状態にあつた。クガイサウの分布は植物總覽に依れば九州にはある事になつては居るが私は祖母山以南では發見して居ないが久住山の草原にはある事と思ふ。而して更に興味ある事はクガイサウの花は濃青色である事である。然るに此處にあるものは大部分は矢張り濃青色であるが中に紅紫色、桃色、更に一驚に價するのは白色花を開いたものが異なる場所に三本あつた事である。此の異状色の花を着けた莖は何れも其の屬する株の中では縁に生育して居た。これも興味ある一つである。此の現象は種々なる意味から非常に興味ある事實であり、又園藝上からも價值あるものと思つたが仕事の都合上根を持ち歸る事の出来なかつたのは残念である。折から花の少ない時期なる故此等の花にはアブ、ハチ、ヒメアカタテハ、キアゲハ、アサギマダラ、ヘウモンテフの類が澤山集合して居た。

少憩後更に山腹を進めば間も無く右側に頂に通ずる小徑を發見し之に従へば灌木は次第に低くなり、ともすれば枝に頭を打つけん許り。見れば今迄周圍にあつた様な大木はなく皆灌木許りでツクシシヤクナゲの大きなものが非常に多く澤山の果實と來春美を競はんとする蕾を丸々と鱗片で包んで居た。頂上に立てば山又山、稜線は四方八方に延びて何處で盡きるとも知れず、鬱々たる樹海は目の前から彼方の雲の中に没する迄波を打つて居て、人間の手が何處に加はつて居るか、それも發見出來ぬ位總ての人間の世界が深い緑の各底に吸ひこまれてしまつた様に。これが九州に於ける一番大きな樹海であると思はせた。頂上附近は草本は少く皆灌木又は灌木狀の喬木のみで、オホヤマレンゲ、ムシカリ、マンサクブナ、ベニドウダン屬の一種、ツクシシヤクナゲ、ベニウツギ、ミヤマシグレ、ヤナギの一種、コバノトネリコ、アカモノ、コシアブラ、コツノハシバミ、コミネカヘデ、コハウチハカヘデ、ナ、カマド、リヤウブ、ノリウツギ、ヒロハヘビノボラズ、クロヅル、アキノキリンサウ、ユキザサ等である。

頂上で晝食を攝り再び先の草生地に下り、荷物を下して目的の植生調査に取りかゝつた。豫定の仕事を終つて歸つて見ると、既に立派な露營準備は整つて居てブナの薪は山積され、焚火の周圍には褥としてブナの葉が一尺も高く積まれ、その廻りにはシロモジの枝で防風垣が立てられ然もその内側の所には觀費用にクガイサウの花迄挿してある念の入れかたで夕食も濟めば折から晴れ渡つた星空に、天にも届かん許りの焚火の焔の末から火の粉がちらちらとブナの葉蔭に消える景色と嚴な氣分これこそ山ならではの味ひ得ない自然生活の優なるものであらう。

明れば八月十三日。正午迄に仕事を終り、再び訪れる事の出來さうもない此の山に無限の愛着の心を感じつゝ下山した。

尚今夏、御厚意に依つて大村君を初め筆者等六名が熊本營林局の植生調査に参加させて戴き大變に御世話になつた本校第三回卒業生字野宗雄氏は旅舎に於て病を得られ仕事半ばにして去る十一月十五日に病歿せられました。謹んで哀悼の意を表します。



# 蛇類の實驗法

## 特に蛇皮鞣法の實驗に就いて

中 島 茂

### 1 緒 言

爬虫類の發生は遙昔、中生代に其の端を發したるのであるが早くも時代の寵兒として全盛を極め中生代は恰も爬虫類時代の觀を呈し、人類生活も其れが爲めに多大の制限を受けたことは想像に難くない。現在吾々の爬虫類に對する恐怖心は實に原始人類よりの系統的特性なりと高調する者さへあるが該説是非を別としても殆ど本能的に迄で深められてゐる吾々の彼等に對する嫌惡の念を何人も否定し得まい。

爾來、溫暖多濕を以て氣象的に特色ある宮崎縣は更に動物學上よりも豊富なる爬虫類の分布相を以て特色附けて異彩を放つてゐる、此の事は縣外より足跡を新にした人々に對して確かに驚異的な事實と思ふ。

されど本縣に於ける爬虫類、殊に蛇類に關する分類學的調査の如きは等閑に附せられてゐるのを遺憾とする、之れ畢竟參考文献の極めて僅かなる爲に研究上幾多の困難を伴へると共に蛇類には幼生期と成体期とにより形態を甚しく異にするものがあつた種々檢索上困惑を來すのに依るものと見る。

著者は茲に先づ本校動物學教室にて蒐集せる主として宮崎縣産の蛇類に就いて分類を行ひ、動物學實驗材料としての蛇類の取扱法より實驗法の要點を述べ、更に蛇類の用を説き、終りに實行せる蛇皮鞣法を報ぜんとするのである。

### 2 蛇類概記

爬虫類が兩棲類より進化せることは既に化石動物學の説明する處にして此の變遷期は石炭紀であると見做されてゐる、其後侏羅紀、白堊紀に至つて爬虫類の生活は空中、陸上、水中、何れの生活にも適應し所謂地上の霸權を掌握し、後期古生代を兩棲類時代と云ふなれば將に中生代は爬虫類時代を劃せるものと云はねばならぬ。然し其現在の蛇、蜥蜴、龜、鱉、鰐等の數系統を残して第三紀時代に氣候的大變化に遭遇し、之等の數系統を残して絶滅したものと考へられる。

爬虫類の分類は Zittel に依れば次の9目を上げてゐる。

第1目 啄頭目 Rhynchocephalia 例 Hatteria

第2目 有鱗目 Squamata 蜥蜴、蛇

第3目 魚龍目 Ichthyosauria (化石動物)

第4目 鱗龍目 Sauropterygia (同上)

第5目 獸形目 Theromorpha (同上)

第6目 龜鼈目 Chelonia 龜鼈

第7目 鱷目 Crocodilia 鱷

第8目 恐龍目 Dinosauria (化石動物)

第9目 翼龍目 Pterosauria (化石動物)

今陸棲蛇類に見られる適應現象の主なるものを上げれば次の様である

1 体制、脊椎動物は左右相稱であるから蛇類も原則として其の体制を保つと雖も生殖腺即ち精巢並に卵巢の位置は左右對稱的配列を破つて左右の何れかが多少前後にずれてゐることは成るべく体の横的成長を最低限度に止め且又体圍の極部的増加を防止し以て運動の圓滑を計らんとする適應現象の發露と見る。

2 運動器官、四肢は退化するか或は所謂蛇足と稱して痕跡的な無用の存在となつてゐるものもある、従て四肢に代るべき運動器官として鱗が出來た理である、然し鱗に於ても運動に關與するものは腹鱗であるから一般に其等は体鱗より發達が著しい、されば運動性の緩漫なるメクラヘビの類にあつては腹鱗の發達に見るべきものがない。

3 冬眠、秋末になれば体内に白色葉狀を呈するも脂肪体の發達を促し後部内蔵の諸器官は之れに依つて被はれるに至る、斯る脂肪体は冬眠中の貯藏養分として重要なるのみならず、諸器官の機械的保護として役立つのである。

4 捕食、蛇類が自体より大なる食物を嚥下する爲めに方骨の發達を起し他の脊椎動物とは異なる嚥下機構を示すこと、なつた、更に有毒蛇類に見る毒腺及び毒牙の發生は捕食並に自体保護上大切な適應と見なければならぬ。

次に蛇類の生殖に就いて見るに蛇類は元來卵生であつて僅かのもものが卵胎生を行ふのである、然し卵胎生は産卵孵化せらるべき卵が産卵前に体内に於て孵化して後産出されたものであるから卵生の異例と做なす位で兩者に本質的の差異を見出し難い理である。されば一般が卵生と認めていたエラブウミヘビにあつても生活狀況に依つては卵胎生になる可能

性は多分に持合せてゐるのである。

### 3 宮崎縣産の蛇類

本縣は温帶の略々南限に位し、降水量の多い爲に、四季温暖多濕なる氣候を現出した、斯る環境は蛇類の生活に對して好都合であるから茲に我國有數の豊富なる分布相を示すに至つたのである。

蛇類檢索に於て特に注意すべきことは前記の様に成体と幼生とに依つて色斑を甚しく變化することであつて彼のアナダイシヨウ幼生の如きは体側に數多の褐斑を現し一見、ヒバカリに似るし、又ヂムグリ幼生は全体が橙黄色を帶び腹面の黒斑を缺き如何にも別種の裝を示してゐる。

尙稀に白化した所謂白蛇なるものがゐるて既に山口縣玖珂郡麻里布町には天然記念物とさへ指定されたものもある。本縣にて採集された白蛇で著者が調査したのはヂムグリの白化せる次の如きものである。

採集場所——南那珂郡、無頭子山麓

採集地の狀況——岩の下にて多濕なる地

採集月日——1933. 4. 7

採集者——川越源一郎

体形表

全長=860mm (總排泄腔より尾端迄は 145mm)

腹鱗=222枚

体鱗= 21枚

尾鱗= 67對

肛鱗= 2分す

以上掲載の分類は牧氏に依れるもので種は本校動物教室所有の大部分で採集場所、採集月日並に採集者の明瞭なるものは附記して置く。

#### 第一科 盲蛇科

・盲蛇屬——メクラヘビ

標本番號	採集場所	年月日	採集者
No. 1	琉球嘉手納	1927.7.12	北尾

#### 第二科 蛇科

游蛇屬——ヒバカリ

No. 2	宮崎市神宮東町	1934.5.30	小松
-------	---------	-----------	----

同屬——ヤマカガシ

No. 3	宮崎市下北方	1934.7	中島
-------	--------	--------	----

## 其他多數

## 高千穂蛇屬——タカチホヘビ

No. 4 熊本縣八代郡樺木村 1934.9 吉 江

## 滑羅屬——シマヘビ

No. 5 宮崎市下北方 1926.7 中 島

## 其他多數

## 同 屬——ヂムクリ

No. 6 本校庭園 19 (幼生) 中 島

No. 7 同 上 (幼生) 同 上

No. 8 宮崎郡清武村船引 1931.9.14 長 友

No. 9 宮崎市下北方 (幼生) 1932.8 中 島

No. 10 同 上 1932 同 上

No. 11 南那珂郡 (幼生) 1933.10 不 詳

No. 12 尾鈴山轟 1934.5.10 楠 本

No. 13 小 林 町 1934 鷹 野

## 同 屬——アラダイシヨウ

No. 14 本校農場 (其他多數) 1928.4.30 北 尾

## 青蛇屬——アラヘビ

No. 15 台中州東勢郡石壁坑 1929.7.8 田 原

## 斑蛇屬——シロマダラ

No. 16 宮 崎 縣 1934.3 不 詳

No. 17 南那珂郡南郷村大島 1934.9.6 中 島

No. 18 兒湯郡三財村寒川 1934.10.28 楠 本

## 第三科 脊高蛇科

## 第四科 溝牙蛇科

## 雨傘蛇屬——アマガサヘビ

No. 19 臺 灣 1928.9.28 絲 山

## はい屬——ハイ

No. 20 沖繩縣國頭郡國頭村 1930.8.30 知 花

## 第五科 海蛇科

江良部海蛇屬——エラブウミヘビ

No. 21 宮崎郡青島 1932.8 吉賀

No. 22 宮崎市一ツ葉濱 1935.1.20 河崎

背黒海蛇屬——セグロウミヘビ

No. 23 宮崎市一ツ葉濱 1931.8.10 長友

No. 24 宮崎郡青島 1933.8.7 日野

## 第六科 鎖蛇科

## 第七科 腹蛇科

腹蛇屬——マムシ

No. 25 本校水田 1929.6.12 松原

No. 26 同上 1933.6.26 寺尾

其他<sup>2</sup>頭

はぶ屬——ハブ

No. 27 沖繩 1925.秋 鎌田

## 4 蛇の實驗要點

蛇類を材料とする動物學實驗を3時間の6回として實驗法の要點を記して見やう。

第一實驗 採集、材料としては成る可く個体數の多い無毒蛇が良いのであつて、シマヘビ、アヲダイシヨウ、ヤマカガシ、の3種を主体としてゐる。先づ採集日としては初夏の曇天特に雨後の斯る天候には蛇類の出廻りが多く、又採集場所としては田畑の用水路又は山麓の小川に沿へる地域が最も捕獲數が多い。採集の注意としては重要なことは蛇に損傷を與へぬことであつて其れが爲には上手に生捕るのが最安全である。用具としては手頃の棒、手袋及び籠等であつて、蛇を見出すや其の棒で頸部を壓へ附け、次で頸を捕へて籠に移すのが良い。蛇類の生活も決して孤獨ではないから1匹見附けた附近には相手の1匹も居るものと氣を付けねばならぬ。上記の天候と場所にて採集を行ふならば容易に各自1匹宛の捕獲は間違ない、採集後は大型の収容器に集めて少くも2日間は絶食を圖り次の實驗に供するのである。

(準備品) 實驗室=大型蛇収容器、小型蛇採集器

實驗者=手袋、捕獲棒、實驗手帳

第二實驗 外景及内臓觀察と蛇皮鞣開始、外景觀察に先立つて殺生を

行ふ、籐め硝子製の密閉容器（大罎）を備へ、之れに蛇を選びながら移し、蓋の間隙より Chloroform 数滴を加へると數分間にて完全に麻酔する、此の際、麻酔時間を計るに有毒蛇のマムシは無毒蛇より概して長く抵抗力を保つてゐることが知れる。間も無く蛇を取出して清水を入れた別器にて全体を洗ひ、藥液又は排泄汚液を去つて解剖皿に戴せて外景觀察を行ひ、次の体形表を完成する。

全長＝頭部先端より尾部末端迄で、(單位m.m.)

尾長＝總排泄腔の開口部より尾部末端迄で、(m.m.)

体鱗＝腹鱗以外の背面及び側面の鱗を稱し、体周に沿へる配列數を表示する、(枚)

腹鱗＝腹面に縦列する大形の鱗で頸部より總排泄腔の開口部迄の數を示す、(枚)

尾鱗＝總排泄腔の開口部以後腹面鱗の尾部末端に至る迄の數を示す、(對)

肛鱗＝總排泄腔の開口部所謂肛門と呼ばれる部の腹面鱗を觀察し2分するか否を記す。

体形表が出来上り更に外部形態の詳細なる觀察が終れば種名が與へられるのである、此の際序に性別の鑑定を行ふのも一興あることである。概して雌は大形で全体が太短く、殊に尾部が短く一見切斷せられた觀を呈する、然るに雄は小形で全体が細くすんなりとし取分け尾部は細長で尖端を以て終る。斯くして愈々蛇皮糝の爲め剥皮に取掛る、解剖鋏にて頸部上の部皮膚を切廻し、一方は頭部を握り、他方は皮膚を持つて逆剥ぎとすれば總排泄腔のあたり迄では難無く剥皮が出来、次に此の總排泄腔の開口部を丁寧に皮膚より切離して一氣に尾端まで剥皮を行ふのである（後記蛇皮糝法參照）續て内臓膜を切開し各器管の排列、聯絡狀態を觀察する、特に膽囊、脾臓及び脾臓の觀察は器官の死後變色を起さぬ生鮮の時でなければ正確を期し難い。生殖腺の配列は前記の如く生活と重要な意義を有するから輕視してはならぬ。實驗終了後は大形解剖鋏又は解剖刀を以て頸部より頭部を切り離し、次の貯藏液（石川式固定液）に浸漬して次回の材料とする。

70% Alcohol 4 5 cc

Formalin 1 0 cc

水 4 5 cc

(準備品) 實驗室=殺生用大樽、新聞紙、蛇皮容器、蛇内臓模型圖、  
Chloroform

實驗者=解剖器、實驗手帳

第三實驗 内臓の圖示 (Sketch) 前回の新鮮なる材料に於ける觀察を  
想ひ起しながら實物に當り細微なる内臓背面圖示を行ふ。

(準備品) 實驗室=蛇内臓模型圖、新聞紙

實驗者=解剖器、圖示用具

第四實驗 頭部鱗片の觀察及び圖示 第二實驗の際、切離したる頭部  
を用ひ背面、側面、腹面の3方面に亘つて鱗片の外形を觀察及び圖示す  
るのである、蛇類の鱗片は種の特徴として分類學上大切な役目をなして  
ゐるが頭部鱗片の如きは同種間にあつても個體的變異の可成に大なるこ  
とに氣附かねばならぬ。

(準備品) 實驗室=蛇頭部鱗片模型圖(背面、側面、腹面圖) 解剖皿

實驗者=解剖器、圖示用具

第五實驗 口腔の觀察及び圖示 第四實驗後の材料を解剖皿にとり開  
口水洗し動物針を以て固定する、舌の形態並に機構を究むること。

(準備品) 實驗室=蛇口腔模型圖

實驗者=解剖器、圖示用具

第六實驗 頭部骨骼の取出及び圖示 第五實驗後の材料を豫め80度位  
に加熱した温湯に10分内外浸漬し、取出して冷水で洗ひ**ビンセット**、解  
剖鉗、解剖刀を用ひて皮膚及び筋肉を除去する、此の際、肉離れが悪い  
場合は更に温湯に浸漬するのであるが過度の浸漬は臙並に軟骨を溶解し  
て結果が思はしくない。特に方骨及び翼骨と關節骨及び隅骨との接着部  
は離れ易いから注意を要する。圖示は側面圖とする。

(準備品) 實驗室=蛇頭部骨骼側面模型圖

實驗者=解剖器、圖示用具

## 5 蛇皮鞣法

次に掲げる蛇皮鞣法は明礬鞣を骨子として著者が實行した方法である

1. 採集—外傷を付けざる様に捕へる、脱皮後の蛇を良とする。
2. 殺生—Chloroform を用ひ瓶内にて行ふ、水洗後剥皮に移す。
3. 剥皮—頸部の皮を切廻し裏返しに剥皮する、總排泄腔の開口部を切抜く。
4. 脱脂—殺菌 70% alcohol に1週間浸漬、時々攪拌する。

5. 第一醃、一次の液に2週間、浸漬、時々攪拌する。

}	水	100cc
	明礬	10gr
	食鹽	10gr

6. 張付、一面の平滑なる板に裏返として張付け縁を竹釘にて止める

7. 第二醃、一次の液を刷毛にて塗抹する。

}	水	100cc
	明礬	4gr
	食鹽	3gr
	メリケンコ	10gr
	オリーブ油	0.5gr
	卵黄	0.5gr

8. 乾燥—3日間、陰乾とする。

9. 仕上—Glycerine と卵黄とを等量混合せる液を脱脂綿にて塗抹する。

## 6 蛇類の用途

近來、勃興せる郷土研究は地方動物の加工並に利用に進出して野趣に富める郷土物産を作るに至つた、蛇類の用途の如きも次第に擴大せられ就中、蛇皮利用の手藝品には最近見るべきものが多い。今蛇類の用途を分類表示して見やう。

薬用品=

蛇酒—まむし酒、(養命酒)と云ふがマムシとのみに限らず蛇を長年月に亘り酒漬とし濾過、調味、稀釋を施せるもので所謂蛇探釜は蛇酒の製造元で採集に従ふ者の職名である。

蛇干物—各種蛇を剥皮乾燥せるもので黒燒として薬用とする、適應症として云はれる處は次の様である。

マ ム シ—強壯劑

エラブウミヘビ—強壯劑

ヤマカガシ—脊髓病

シマヘビ—肋膜、肺病

アヲダイショウ—黴毒、淋病

ヂムグリ—胃病

蛇油—蛇類を煮出せる油は塗布薬に混じて創薬とする。



- 毒液—毒蛇を以て抗毒性血清を製し防毒用とする。
- 工藝品—蛇皮を製革して原料とする。
- 樂器—古來琉球で用ひられた蛇皮線の胴は印度に多いバイソン (Phthon) 及び其類の皮である。
- 文房具—ペン軸に蛇皮の尾部を張付けたるもの。
- 履物—上靴(婦人用)
- 其他手藝品—蓑口、手提袋、ステッキ、(蛇皮張付)煙草入れ、革帶等。

### 7 文 献

- 1 牧 茂市郎— 1931 日本蛇類圖譜 1
- 2 同 上— 1933 同上 2
- 3 室岡孝治— 1929 日本普通動物の解剖
- 4 高橋精一— 1930 日本蛇類大鑑
- 5 日本動物圖鑑 1927
- 6 應用動物圖鑑 1930

(1935.2.4. 於宮崎高等農林學校)

## 宮崎高農蠶室に飛來せる昆蟲

### 四 本 正 秋

筆者は昭和七年五月から九月迄の凡そ五ヶ月間、蠶室の電燈に飛來した昆虫を採集して、其等を調査して見た。讀者諸賢の御参考にもなれば幸ひである。

養蠶期は四月中旬から十月初旬までであつて、三日交代に宿直し、生徒の實習指導のかたわら、又飼育實驗の間々に採集したのに過ぎない。

養蠶室には所々に電燈があるのであるが、その全部を見廻ることは出来なかつた。見廻る時間も一定せずして、兎に角手の圍いてゐる時で、壯蠶期や上簇中の如き多忙な時には採集をなし得なかつたこともある。

養蠶室の北側と南側とでは飛來せる昆虫に異ひのあるのが見られる。

それは北側はクス、マツ、クスギ等の林であるのに反して、南側は前面開けてゐるが爲めであつて、例へば北側はマツカレハ等が多いが南側はアタクサガメ、メイガ類が多く見られた。又南側には小さき排水溝があるが、それに棲んである水棲昆虫も可成り見受けられたのである。

又其の夜の氣象状態に依つても異つてゐた。例へば晴れた夜、曇つた夜、蒸し暑い夜、雨天、風の吹く夜等の如くそれぞれ異ひがあるのであるがそれ等は抜にして考えて見る。

五月から九月迄の間に何れ程の昆虫が飛來して來たか次の表に示す通りである。

目	種類	個体数
鱗翅目	66	409
鞘翅目	30	337
双翅目	8	37
直翅目	4	50
蜻蛉目	1	1
浮游目	2	6
有吻目	6	56
計	117	896

上表で直翅目と有吻目が個体数の多いのは、直翅目ではハネナガヒシバツタの47有吻目ではアタクサガメが36の飛來数を示してゐるがためである。蜻蛉目の1個と言ふのはシホカラトンボの雄で珍しいものである。昆虫の中でアカリを慕ふ力の舉大なるものは何んと言つても鱗翅目を先づ第一に挙げねばならぬが、すべての昆虫が極く僅か乍ら有するのであつて、之れはとききき稀にシホカラトンボ、或は蟬類の如きものが室内に飛來する事によつて明である。

次に各月の飛來数を上げて見ると次の通りである。

日	5月	6月	7月	8月	9月
鱗翅目	101	113	99	21	75
鞘翅目	11	54	199	27	46
双翅目	7	1	5	4	20
直翅目	2	2	44	1	1
蜻蛉目	0	0	0	1	0
浮游目	1	1	4	0	0
有吻目	0	2	8	43	2
計	122	173	359	97	144

上表に依れば7月が個体數に於いて最高位に在るのであつて、以前筆者が或る方面の記録より統計的に研究せし結果と一致するのである。8月は可成り少いのであるが、この事も以前の調査と一致することであつて、又別に之の月は秋蠶實習のため或る程度迄採集の忽になつた事も一原因と信ずる。



## 宮崎縣虫癭數種

伊地知重基

本誌第八號に於て摘記した「宮崎市附近の二三の虫癭」に續いて、私の採集し得たものの中から更に數種の虫癭に就て記したいと思ふ。

### 1. イスハタマフシ

昭和九年四月丸山町にて採集。一種の綿虫科の昆虫に依つてイスノキの葉に形成せらるゝ虫癭で、到る所に見出される。之は葉の兩面に突起を生じ兩面共に直徑3—7 m.m. 高さ3—6 m.m. 位あつて、表面の方の突起は略半球形で平滑、孔は無い。裏面の方の突起は略圓錐形を呈してゐて、殆んで閉合してゐる小孔を有してゐる。有翅虫は其の部分數片に不規則に開いた所から脱出する。癭体の表面は黄綠色、單室多虫、即多數の癭虫が同一の幼虫室の中に生活してゐる。癭虫侵入直後のものは極めて小さい點狀物で黄綠色を呈してゐるが後漸次發達して來ると紫色を呈して來るものが多い。若い葉によく發達し硬化した葉には發育しない。發生は四月頃が多い。

### 2. ニレナガフクロフシ

昭和九年五月四日、宮崎高等農林學校の見本園で得たが、之は一種の綿虫科の昆虫に依つて形成されるもので、葉脈の間に葉の表に向つて有柄の紡錘形、長袋狀の突起となるものであるが、發達の途にあるものに於いては勿論先端は膨大せず、漸次先端膨大して來るものである。柄の部は他の部分に比して色が淡く、袋の部は帯紅色で側壁薄く。裏面の柄

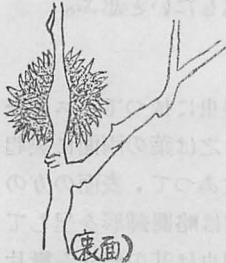
の基部は白色の密毛を以て閉された穴があつて、その直徑も又柄の基部の大小に依るは勿論であるが、突起部の外面は全体密生した赤い細毛で覆はれてゐるので、紅色を帯びて見える。有翅虫は袋状になつた部分の側面を不正形に押し開いた形に裂開した所から脱出する。單室多虫、高さ7—15m.m. 位大抵 13m.m 位、巾は 4—8m.m. 大抵 4m.m 位、柄の部分長 2—5m.m. で巾 1—2 m.m. (圖 1 参照)



第 1 圖 ニレヤガアクロアシ

### 3. クヌギイガフシ

昭和九年三月三十日、宮崎縣南那珂郡飢肥町吉大字野方に得たもので



第 2 圖 (裏面) クヌギイガフシ



(断面)

クヌギの枝に生じ、色は灰褐色、單生の場合と群生の場合とある。單生の場合略球形でその直徑 6—10m.m. 群生の場合 32—50m.m. 兩場合共外壁は硬く厚い。表面には約 6—8m.m. で灰褐色の粗剛な太

い毛を密生してゐる、一種の浸食子蜂科の昆虫クヌギタマバチに因つて作られ、短い小さい柄で枝に着いてゐる瘻体は一部枝の外部を包んでゐる。柄の直上部分が幼虫室にあたり、壁と幼虫室の膜との間に空所がある (圖 2 参照)

### 4. サクラトサカフシ

昭和九年五月五日、第七宮崎小學校の庭の櫻の木に発見したものである。一種の蚜虫科の昆虫 (Myzussaoki Mats.) に依つておこるヤマザクラの葉の隆起で、葉の表の方に向つて鶏冠狀を呈し、葉の側脈の間の葉肉が長く脈に沿つて袋状に隆起してゐる。基部、頂端は薄く中央部は膨れ横断面は略橢圓形、峯面は大きく凹凸し、小さい縦線が多い、裏の

部分は直線状にゆるく閉合してゐるが、有翅虫が脱出する頃は隙間を生じ、そこから有翅虫が脱出するのである、單室多虫で外面は黄綠色である、一葉に 2—1、多いときは 5—6 も生ずることがあるがこの虫癭は日射面が紅色を呈するので、多く生じたときは甚だ美觀である。高さは略 7—10m.m 巾 7—9m.m. 長さ 26—33m.m.位。

#### 5. ヤマザクラハチヂミ

昭和九年五月五日、第七宮崎小學校で上記の虫癭と同時に同株で得たものであるが、一種の蚜虫科の昆虫 (*Myzus higanzakurae* var. *rarus* Monzen) に因るものでヤマザクラの葉の一侧又は兩側が裏の方に巻かれたもので、葉身は縮んで來、葉肉は厚くなつて來る、黄綠色が普通である。

#### 6. ヤナギハフクレタマフシ

昭和九年五月十三日尾鈴山の麓で得たが、葉の中脈の一侧の葉肉が表裏同様に膨れて黄色を呈し、日射面のみ赤色を帯びて來る所の虫癭である。表面平滑で、壁は薄く、内部は大きい空室となつてゐる、一種の葉蜂科の昆虫に依るもので、直徑 6—10m.m. 高さ約 6—10m.m.

## ハンザキに就て

齊 藤 五 郎

有史以前の動物の一つとせられ日本特産であるハンザキー名山椒魚は天然記念物として有名である。私の郷里京都の方では俗にアンコと言つて居る。山椒魚と言ふのは皮膚の色や表皮が山椒の木の方に良く似て居り山椒の様な香氣が有り河に居るから山椒魚と言ふのださうである。東洋主として日本中國地方に居る、日本特産で外國では絶滅して今から 200 數十年前に獨乙の南方の一村にて之の山椒魚の化石が第三紀層にて發見せられ一見人の骨の様であつたので村の醫者は之れを以て恐らくノアの大洪水にて溺死した人類の化石として居たのである。其れで無くとも人間に近き動物の化石として當時の學界にも認められて居たとの事

である。所が獨人シイボルトが日本に来て始めて巨大なる山椒魚を見て大いに驚き喜んださうである。前世紀の遺物山椒魚が獨り日本にのみ棲んで居るのは何故だらうか、然し日本に居るとしても未だ見た事の無い人が随分居る事と思ふ。

今から私の郷里京都府下南桑田郡の溪流に棲んで居る山椒魚の生活状態及び傳説等を記して見よう、山椒魚は諸君御存じと思ひますがヤモリか池に居るイモリを大きくした様なもので大きいのは4尺5寸位になる頗るグロテスクで初めて大きいのを見ると恐い様である、皮膚は粘液を絶えず分泌してぬるぬるして居て鰻の様で粘液が手でこすると取れる。口の大きいのは一驚する。鋭い眞白い小さな齒が上下に列んで居て赤い色をして居り口を開けると氣味悪い位である。眼は胡麻の様ののが前に2ツ皮膚が凹凸して居て同じ様な色だからしてよほぎ良く見ないと見えない。肉は眞白で喰べて見るとタコの様で一寸美味である。諸種の病氣に良いとか言つて田舎では料理にして食つて居る。元來山椒魚は深山の溪流に棲み日中は岩石の下や草の中で過し夜出て食を取る。私の郷里は保津川の支流で今までは相當多く居たが獲るのが多いので今では一寸獲れない。之の頃では保護して獲らない様にして居る。古老の話に依ればアノコは北向きの谷でないと居ないと言ふ、其れも一理があらう。粘液を体分泌して陸に上つたとき日光で体の表面の乾くのを防ぎ元來濕氣の多い日陰を好む動物であるから、大抵は冬岩の下等に居るが時に朝早く行くと草の露が落ちて草が倒れ一見大蛇が歩いた跡と思はれて其れをつけて行くと此のハンザキの大きのに出會ふ事がある。兩棲類で水陸兩方に棲む。随分永く水が無くとも丈夫で何とも無いらしい。私が小學校6年のとき4尺位のが獲れて學校の理科教室に大きなたらひに入れて蛙や蟹を與へて飼育して居たが金網を或る日閉めるのを忘れたので其處より逃げ出し大捜しをしたが判らず其の儘十日以上も経つてから次の室の床の戸柵の奥の方へ入つて居たのを掃除したときに見付出して又飼育したのが元氣で前と同様であつた。此の様にして地上を歩いて蛙を捕へたり水中では蟹、魚類を捕食したりして生活して居る。運動は極く遅いが良く食物を捕るものである。多分大きな口で色が保護色で地上等では一寸判らない、靜止して居るとき前に蛙でも通ると一度に大きな口を開いて捕へるのであらう、其の證據には此の山椒魚を獲るのには恰度鰻を獲るとき漬針とか挿込みとか言つて針の先にミミズを付けて糸で針を結んで獲るのがあるが其れと同様で大きな針を曲げて其れに蛙をさして之れを竹の

尖端に付け谷の岩石の下等で居そうな所へ静かに入れると其所に居れば一度に飛付いて決して引張つても離さない。其れで昔より一度之れに手を嘯まれると手が切れてしまふまで放さないと言ふので手で捕る事はしないのである。それで引張つて捕へるのであるが又此の様なのを澤山？居ると思はれる處に挿して置き鰻の付針の様にして捕える。針を蛙と供に喰つても少し小さい針であると何時の間にか出してしまつて口の處で糸だけ切れば其の儘生きて居る事がある。普通は上の様にして捕へて居るが途中で見付けば藤の皮を脱いで繩の様にして一つ輪を作りその前に其の輪を置いて後より一寸つつくと頭がその輪の中に入ると早速絞つて首の所でくつてしまふ此れをぶら下げて歸る。今では大きのは少なく三尺位のものであるが明治の初め頃初めて之の谷の方へ道が通じた頃は相當大きのが居て牛が驚いてごうしても河を渡らなかつたさうである。私の村の奥約2里半位の山中に石灰岩を取つた跡で深い澗があるが昔大きな山椒魚が居て水中で異光を發しその澗の主として、今其處に祠があるが、たたりが恐しくて奉つたものらしい。之れと同様な傳説が多く今でも居る備後國向湯原村に鯢魚大明神祠がある。傳へる所に依れば之の村に龍頭瀬鯢魚淵あり。元祿の昔此處を通りかかつた時水中に怪物あり良く見れば大山椒魚なり、三井彦三郎なるもの一刀を手にして綱を体にしばり水中に入り遂に呑入れたが少年彦三郎は刀にて腹を切り開き綱につたつて水上に出た、村人多くして之れを引き上げしに長さ3丈半周圍1丈3尺あつたと言ふ。其の夜少年の家の門前にて門を叩いて號泣して去るそれを追へども姿が見えず。幾何も無くして家の者相繼いで死す故に之れを祠つて今に残ると言ふ。

又最近京都府下北桑田郡の或る村で大きい山椒魚が獲れ珍らしいので京都動物園に持つて行き飼つて貰ふとして村長さん等が持参した所園長さん曰く市中では之の様な大きなもの飼育するのに飼料に困まるので飼ふ事が出来無いと又動物園に之の様な大きなものが無くして小さいので良いので有るから折角だがと返されたと言ふ事である。現在では大きのは漸次少なくなつて行く様である。村の老人が言ふのには1尺位の大きさに4.5年位経たものださうである。4尺以上のものは私達の年齢位経つて居るのでは無いだらうか。卵は夏の初め頃岩石下に産み蛙の卵の様である。卵の数は相當多く自分で抱いて保護して居る。近年捕獲される數が多く年と共に減少して行くのは眞に残念な事である。よろしく産地では保護して此の珍動物を永久に残したいものである。

## 趣味の蜘蛛採集

王 寺 幸 寛

ま へ が き

蜘蛛類（ここに云ふ蜘蛛類とは一般の蜘蛛を指すのであつて Cranaea の事である）は昔から直接に人間に利害關係を有することが少ないものとして興味を引かず、人に輕蔑されて來たために、研究も進まず、現今に於てすら、尙幾多の開発、調査の餘地が残されている、と言ふよりむしろ、大部分は未開發であると言ふ方が當るかもしれない。

然らば果して、かく無頓着に看過さるべきものであらうか、過去の動物研究の不完全な時代は別として、現今の如く理論動物學方面が進歩しそれが要求する範圍は愈々擴大し、深度は益々深くなりつゝある時代に於ては、最早や、論ずるまでもなく、開發せられなければならない運命に立至つて居る。

そしてこれが調査研究せられる事に依つて、今日の動物學上、就中動物生態學的方面、及び動物地理學的方面に持來さるべき効果は、それが未開發であるが故に一層重大なものとなるであらうことは想像に難くない、尙實用的方面から見て、現今蜘蛛を直接に利用して居ると言ふことは、數へるに足らないほごである。

蜘蛛を薬用とすることは古來行はれて居ることであり、蜘蛛の絲は外國に於て實用化を企てたものも少くないが實際に實用的に成功したものは殆んぞないと言ふことである、バリの學士院では曾つて有名な昆虫學者 Reaumur に蜘蛛の絲の實用化を研究させたが、彼の實驗では、大規模の工業的製産は不可能であると言ふ結論に到達した。

上述の如く、現在と雖も實用化されて居る事は殆んぞないが唯蜘蛛について注目すべきことは、彼等の殆んぞすべてが、害虫を捕食する所の有益動物であると云ふ事である、實際彼等は常に昆虫を捕食して生活して居るのであるから、人が氣附かない間に恐ろしく莫大な利益を與へて居るに違いない、故にこの方面に關しては調査が進めばその積極的利用の途も計るに難いことではない、と考へられる。

かくの如く純動物學的方面より、又應用的方面より見ても、蜘蛛類の調査の必要は愈々増大して居る状態にある。



しかし蜘蛛を研究するには、昆虫の様に簡単に標本も作ること出来ず又文献も少いから暗夜にものをさぐる様に困難であり、極めて不正確な調査しか出来ない、故に一ツの事について完成することなきとは全く縁遠い事である、實に足もとから一步一步進むより外仕方がないのである。

### (1) 蜘蛛の研究の第一歩

蜘蛛に關しての文献は、邦語のものは僅少である、今それを擧げて見ると。

1. 蜘蛛の研究 湯原清次著 昭和6年
2. 多足類及蜘蛛類! 江崎悌三著、昭和5年、岩波講座一冊の本となつてゐるのは以上で、外に色々な人の部分的に載せられた本もあるが多くはない。

蜘蛛を調査するには先づ文献から、専門語なごを引張り出す必要があるから擧げて見た。

動物の研究は、第一歩は採集に始まると言はれてゐるほごであるから適當に採集しなければならない(この事については後に記す。)

採集したものは標本とする必要があるから、今私の用ひて居る標本製作法について言ふと、

先づ採集して來たものは、これについて適當なる記載をした後、番號を附した液漬用ガラス管に保存する、液は

1. 3—10% フォルマリン液
2. 75% アルコール液
3. 石川氏固定液

第1の3—10% フォルマリン液は、入れて硬くなれば再び軟くすことは出来ないから硬化してもかまはない。標本に用ひる、これは變色が少い。

第2、75% アルコール液は、後取出す必要あり、硬化すべからざる標本用とする、變色が太である。

第3のものは1と2の中間用の標本に用ひる。

かくして出來た標本は適當に保存し何時でも容易に目的物が取出せる様に整理しておく。

蜘蛛を採集する場合には、同時に彼等の生態、生活場所等に注意し、卵囊、卵、其他必要な附屬物は標本と共に藏して置くことが大切である採集した個体については成可くスケッチを行ひ、特徴をつかむ様に氣を

附けるべきである、尙研究上、飼育して見ることは最も有効な手段である。

## (2) 蜘蛛採集の時期

蜘蛛は年中捕ることが出来るが、一番よい時期は秋から冬であらう、彼等の大部分は越冬するので而も成虫態であるから、この時期こそは一網打盡に捕へられる絶好のチャンスである。松葉、朽木の下或は土堀の隅から大木の樹皮下に至るまで地上の陰所と言ふ陰所にはあらゆる種類が鬱々として春を待つて居る。

しかし越冬しないコガネグモなどの類は何しても夏でなければならぬいしかしこれ等も山野に Net を振りさへすれば容易く豊富に捕ることが出来る。

春は幼虫が多く又冬捕つた残りばかり目につき、一番面白くない時期である。

昆虫と違つて雨の日にも、風の日にも、採集することが出来るし、ひまな時は何時もよい時であるから、採集する者は常に採集用の小ガラス管を携帯して、日頃注意して居る事が最も便利な採集法であらう。

## (3) 蜘蛛採集の場所

蜘蛛は殆んどすべてが昆虫を捕食して生活して居るから昆虫の住む所には大概住んで居る。

1. 花に集るもの！ 春夏の候山野より人家の庭園に至る迄咲きみだれる花には数知れない昆虫が集ひ、蜘蛛は彼等の虚をねらつて花の影にひそみ、或は花色に擬して悠々と花上にのさばつて居るものもある。これらの蜘蛛は主としてカニグモの類で彼等は網を張らない。例へば最も普通なものはハナグモ、アヅマカニグモ、ヤミイロカニグモ等で外に名の判らないのも甚だ多い又花上にはササグモ、ネコハヘトリグモ、或はサツマノミダマンの如きものも住んで居る。

2. 樹上に居るもの！ 歩行性のものは葉の上から枝の頂上迄這ひまはるので葉に住むものと明かに區別は出来ないが、主として樹幹のみ這ひまはつて居るものには、ハヘトリグモ、エビグモ、ヤブエビグモ、クロアリグモ等であらう、因にクロアリグモはアリとそつくりの形でアリの巢内に侵入して卵なごを奪つてくると云ふ愉快な奴である。

3. 葉上に居るもの！ 喬木或は下草に至る迄植物の葉上には常に待機して居る蜘蛛が少くない、ハマキフクログモ、ヒメフクログモ、ヤハズフクログモ等は比較的小さい樹木の葉を巻いて居るが、ワカバグモ、コマ

チグモ等は比較的高い木の葉の上に生活してゐる、其他多くのハヘトリグモの類、ササグモの類も葉上に居り、ハグモの類は主に小さい草木の葉上に見られる。

4. 樹間に居るもの！ 我々が森の中なごで最も煩はされるのはこの樹間に張られてゐる網で、除いても除いても、執念深く、くつゝいてゐるのには參つてしまう、樹間に居るものは主として、コガネグモ科のもので、デヨロウグモ、コガネグモ、オニグモ等はこれ等のアウソリチーで Authority  
ある。

外にアシナガグモ、長くゴミを貯めてゐるゴミグモ、腹部の長くなつたオナガグモ等變つたものも多い。

5. 草間に網を張るもの！ 道端の草の間には美しいドヨウグモが居り、稻の間なごにはコガネグモダマンが小さい網を張る、トホシドヨウグモヌサグモ、シロガネグモ、ナガコガネグモ、サツミノミダマン、フタホシトゲグモ等何れも美しいものぞろいである、又クサグモ、コクサグモ等はラツバ状の柵網を張つて居るものである。

6. 土表に棲むもの！ 土地の表面を走りまはり或は朽葉の下に陰れて居るものはこれに入れることが出来る、ウズキドクグモ、ハラクロドクグモはこの方面の権威者であり、これに次で朽葉下なごにはドクグモモドキ、クシグモの類、アカネグモ、アカアリグモ等が棲み又、葉上から突然地表に飛降りて走つて行くスヂプトハシリグモ、スヂボソハシリグモ、イワウイロハシリグモ等もある。

7. 土地の腔所に棲むもの！ これには、柵網を張つて居る、タナグモシモフリタナグモ等の外に、ヒメグモ科のものや、コガネグモ科のコガネマル、或は、ハヘトリグモ科のヤハズハヘトリグモ等がある。時としてはアシダカグモの類がひそんでゐることもある、ジガバチグモは蜂に似た小さな蜘蛛であるがこれも亦山地の窟壁の空所等で見られる。

8. 穴居性のもの！ 山地の傾斜面或は生垣等の根本近くの傾斜面には自ら穴を掘つて穴居して居る、キムラグモ、トタテグモ等があり、又ヂグモは誰も知つてゐる穴居性の蜘蛛である。

9. 人家に棲むもの！ 夜によく出て来る大きなアシダカグモは誰も知つてゐることであり、障子や壁、板壁等を徘徊してゐるものには、ハエトリグモ、マミジロハヘトリグモ、アダンソソハヘトリグモ等がある、チヤスヂハヘトリグモ、も亦多い。

便所の隅、臺所の隅なごには、オホヒメグモ、ヒメグモ等が複雑な網を張っており、軒端にはオニグモ、カレハヒメグモ等が頑張つて居る。

又不潔な塵の溜つた所にはイウレイグモの類が現はれる、土壁なごには圓い卵を入れたのかと思はれる様な巢を張つてゐる美しいヒラタグモが居る。

10. 特別な場所！ この例としてはオニグモの大きな巢に居候をやつて本尊のオニグモが見向きもしない様な小さな飼を貪り喰つているシロガネイソウログモがあり、又、杉の木の根本近くに丁度カマキリの卵殻の様な形をした蓋の附いた巢を造つて生活しているツクシタテグモがある、又青島の海岸には石塊の上を這ひまはつて居る珍しいハヘトリグモが居る、九州南部の海岸には海水の入つて来る所の岩礁に生活しているイソグモと云ふものが捕られて居る。又水中に生活するミズグモがある又私は曾つて樹液に集つて居る昆蟲をねらつて居る、ハヘトリグモの一種及びカニグモの一種を見たことがある、又水中に生長している植物上に生活し容易に水上を滑走して行くハマキフクログモ、ハシリグモ等も珍しい習性の蜘蛛と云へるであらう。

以上で大体棲息場所は終つたが要するに彼等は歩行するから、住所は常に變化し一定の場所に居ることがないが大体種類によつて生活場所の範囲は一定して居るものである、しかし冬期は何れも雜居して越冬しており、採集はこの期をねらうが一番良いから今越冬場所に就て簡単に説明すると。

1. 樹皮…松杉なごが最も都合よい、ハヘトリグモ類、カニグモ類、ヒメグモ類、フクログモ類、等が主である。

2. 堀の隅！土堀、板堀より石垣等に至る迄空所には夫々巢を張り或は枯草なごも集めて越冬する、ここでは主に、ハヘトリグモ類、タナグモ類、コガネグモ類、ヒメグモ類等が多い。

3. 落葉、葉が一杯堆積している場所なごには極めて珍しいものが多いフクログモ類、ドクグモ類、カニグモ類、ハヘトリグモ類等が主である  
又樹間に蜘蛛の巢なごと一緒に集つて掛つて居る葉の中にも可なり越冬して居る。

4. 地表の空所、其他藁や瓦等の陰、ここには殆んごすべてのものが居り、ワシグモの類が殊に珍しい。

以上の如くであるが、南側の土手或は垣等の如く、越冬に樂な場所も上述の場所と共に探す必要がある。

#### 4. 蜘蛛類の分類

現今に於ける節足動物分類は、15綱に分たれるのが普通で、これの一個に蛛形類 Arachnoidea (Arachnida) があるが、蜘蛛類はこの中の一目に位置するものである。

九大の江崎博士は蛛形類を分ちて9目となし第6目に蜘蛛類 Aranea を位置せられて居る。

蜘蛛類(廣葉)の種類は既知のものでも萬を越えて居ると言はれて居り分ちて3亞目となつて居る。

(1) きむらぐも亞目 Liphistomospha  
これは原始的な種類であつて、他の蜘蛛と異なる重大なる特徴は、腹部特にその背板に明瞭なる分節の現はれていることと、紡績器官が4對(内1對は融合して一個となる)あつて、腹部下面の中央に存することである、呼吸器は2對の書肺よりなる。

この目の種類は、古時代の化石に知られたものが2科7屬12種ある、この類の一部は現存して1科 Liphistiidae を形成し2亞科3屬7種が知られておる、この一種キムラグモ *Heptathela kimurai* Kishida は宮崎市下北山に産する。

(2) とたてぐも亞目 Mygalomospha

腹部には分節なく、紡績器は2對で腹部後端近くに在る、呼吸器は2對の肺囊である、本邦には20種ほご知られて居る、ヂグモ、トタテグモは之に屬する。

(3) 蜘蛛亞目 Arachnomospha

これは狭義的蜘蛛類であつて、一般のものはすべてこれに含まれて居る腹部には分節なく、紡績器は3對ありて腹端近く、缺角は下方に向つており、呼吸系は1對の肺囊と1對の氣管とからなつて居るが稀に共に肺囊又は氣管のことがある。

科の數でも50に近い本邦では 500—600種余知られて居るが現存するものは恐らく數千種であらう。

尙別なことであるが脚の長いメクラグモは蜘蛛類には入らない。

## 天草産サソリモドキに就て

岡 田 正 憲

従来サソリモドキは熱帯又は亞熱帯地方に産し、本邦の臺灣、沖繩、奄美大島以北では絶対に棲息しないものといはれてゐたが、昭和五年一月二日熊本縣天草郡牛深町の自炊庵と稱する寺院の墓地内で、當時熊本縣立天草農業學校在學中の太田實君が、同上の墓地掃除の際、偶然に石の下に潜んでゐるのを發見し、是に依つて日本内地にもサソリモドキが棲息することが確認せられ、動物地理學上大なる貢獻をなしてゐる。即ち該サソリモドキは日本内地に於て最初の發見であり、本郡牛深町(北緯三十二度十一分)は其の産出の北限地である。

サソリモドキの動物學的解説

### 一、動物學上の位置

節足動物、蛛形綱、脚鬚目

### 二、名稱

和名、サソリモドキ

異名、シリテムシ、又はムチサソリ

學名、*Typopeltis Stimpsoni* (H.C.Wood)

### 三、形態

全軀はサソリ又はクモに似てゐて黒褐色を呈し、背甲は長い五角形をなし、觸鬚は鉗に變形して大である。腹部は十二節から成り、末節は小さい圓柱に變じ、後方に鞭狀体を有する。第一脚は細長く其の末節は數多の小節から成り鞭狀を呈して、全部は恰も觸鬚の様な觀がある。雄は觸鬚の脛節部に附屬する突起物の先端が膨大してゐるが、雌は其の先端が鋭くなつてゐる。

### 四、生活狀態

サソリモドキは南向の溫暖な場所に棲息し、石の下或は洞穴等に越冬し、一般に晝間は石の下や洞穴等日光の直射しない場所に潜み、夜間出でて昆虫其の他の小虫を捕食し、又盛んに共食ひをするらしい。天草に在る九大附屬の福岡臨海實驗所で、ワラヂムシを與へて其の數匹を飼育せられた所が、共食ひをして遂に一匹を残すに到つたと云ふ。今迄採集されたものの中、大多數は雌で雄は極めて少いと言はれて居

が、或は之は共食の結果であるかもしれぬ。尙発見者の太田實君は硝子瓶の中で蠅を興へて十余日間飼育して居たが、知らぬ間に瓶口を覆ふてある紙を破つて逃げ去つたと云ふ。昭和六年八月に交尾中の雌雄を採集した人が有り、又三月から五月迄の間に多くの幼虫を認める事からして、産卵は秋期で孵化は春期であると察せられる。石下に潜んだ生体を捕へ様とすれば、尾部の鞭状体及び鉗状の觸鬚と鞭状の第一脚を上げて威嚇し、体から盛んに醋酸臭を發散する。試みに青色リトマス試験紙を觸るれば之を赤變する。手で之を捕へても、暫時醋酸の離脱しないのみで、何等の危害は加へない。要するに該サソリモドキは天草の中でも、最南端の牛深町以外の町村では未だ発見されて居ない。

## 宮崎市附近の雙翅目

高 橋 尋 匡

採集場所は宮崎市附近で極めて小範圍である、昆蟲には植物性のものを食物とする種類と動物性のものを食物とするものとあるが大部分は前者である。然しながら雙翅目の類に於ては後者のものが割合に多いので山野の草木地帯以外に畜舎並に住宅附近に於ける採集が多かつたのである。

採集は五月から十月に至る六月間に於けるものである。採集時期としては五月から七月の初め頃が最もよい時期の様であつた、七月と八月の炎暑の候には日中は野原や路傍に於ては割合に昆虫の姿を見ることが少いが、森林や山間の採集には適してゐた。以下採集昆虫の目録を掲げて見よう。

### 1. シホヤアブ科 Asilidae

- (1) シホヤアブ *Promachus Yesonicus* Bigot
- (2) アラメアブ *Ommatius chinensis* Fabricius
- (3) タイワシシホヤアブ *Astochia virgatipes* Coquillett
- (4) サギジロムシヒキ *Machimus scutellaris* Coquillett

- (5) オホムシヒキ *Astochia Vigatipes* Coquillett
2. ハナアブ科 Syrphidae
- (6) ヒメヒラタアブ *Sphaerophoria taeniata* Meig
- (7) オホヒラタアブ *Dideoides latus* Coquillett
- (8) ナミヒラタアブ *Syrphus (Episyrphus) balteatus* Deg
- (9) シマハナアブ *Eristalodes kobuside* Meijere
- (10) キアシヒメムシヒキ *Cerdistus laetus* Becker
- (11) スカシベツコウハナアブ *Volucella tobanoides* Motschulsky
- (12) ヒラタアブ
3. アブ科 Simuludae
- (13) ウシアブ *Tabanus trigonus* Coquillett
- (14) シロアブ *Tabanus mandarinus*
- (15) メクラアブ *Chrysops suavis* Loew
- (16) キイロアブ *Tabanus fulous* Meig
- (17) シロフアブ *Tabanus mandarinus* Schin
- (18) クロメクラアブ *Chrysops japonicus* Wied
4. ミズアブ科 Storaemyndae
- (19) カウカアブ *Pteticus illucens* Sihin
- (20) ハキナガミズアブ *Rhaphiacera hakiensis* Mats
5. アブモドキ科 Nemestrinidae
- (21) アブモドキ *Hirmoneura orientalis* Licht
6. イエハヘ科 Maschidae
- (22) キンバヘ *Lucilia caesar* L.
- (23) クロバヘ *Calliphora lata* Coquillett
7. シマバヘ科 Sarcophagidae
- (24) シマバヘ *Sarcophaga carnaria* L.
8. ウシバヘ科 Oestridae
- (25) ウシバヘ *Hypoclerma bovis* De Geen
9. カカンボ科 Tipulidae
- (26) マダラカカンボ *Nippotipula Nubifera* Coq
- (27) オホキリウシカカンボ *Tipula longicauda* Mats
- (28) ミカドカカンボ *Tipula mikada* West
- (29) キリウホソカカンボ *Nephrotoma virgata* Coq



## 奄美大島の貝類

本邦産貝類の種類は平瀬氏によれば三千四百余种であると云ふが更に委任統治の南洋諸島に産するものを加へるならば略、四千種に及ぶであらう。

奄美大島は氣候温暖にして霜雪を見ることなく、黒潮流れ、近海には多くの珊瑚礁散在し、中に徘徊する珍稀なる魚介も亦少くない。本年夏休暇に私の採集せるもの、及び、大島中學校博物教室より譲り受し貝殻を本校動物教室に寄贈せるものに就て、特に目立つ種類について簡単に説明し、更に目録を掲げよう。

## リウテン サザエ科

中形の螺貝にして、螺表は平滑にして光澤に富み頗る美麗なり。故に飾物となし珍重せらる。

## テウセンサザエ サザエ科

サザエに似たれども全く管狀突起を有せず、稍サザエより高し、多く珊瑚礁中に棲み、少年魚業者により採取され、肉は食用に、螺殻は貝類の原料として用いられ最も有益なるもの、一つなり。

## タウカムリ タウカムリ科

殻質重厚なる倒圓錐形の大型巻貝なり、裝飾用として愛せらる。

## スイジガヒ スイシヤウガヒ科

方言にて「猫貝」と稱するものにして、管狀突起は太くして數少く水字形の形態をなす、裝飾用に珍重せられ、特に迷信より魔避けとして軒に吊す。

## クモガヒ スイシヤウガヒ科

蜘蛛に似たる外觀を呈せるを以て其名あり、スイジガヒに比するにその管狀突起の數多く、細い。裝飾用として珍重せらる。

## テングガヒ ホネガヒ科

白色大形なる螺貝にして、大小多枝の多くの突起を有し外見グロテスクな姿をなせ共、この貝殻は廣く植木鉢として用ひられ、特にガジマル等を植付け、不定根の殻面を覆ふ美觀は實に言語に絶す。

## ホラガヒ フヂツガヒ科

昔時より陣貝として用ひられし法螺貝なり。

ヤクワウガヒ サザエ科

大形拳状にして、殻質重厚なり、殻表美しく、又殻口内は美麗なる眞珠光を有す、貝殻は細工して、煙草灰皿、釦、其他の器具に用ひられ、磨は玩具とす。

タカラガヒ類

種類多く、子供の玩具として最も普通なるものなり。

ヒレシヤコ シヤコガヒ科

二枚貝中最大なる種類なり。殻面に葉状突起を有するを以て其の名あり。植木鉢、水盤等として用ひらる。

マペ シンジユガヒ科

烏帽子状を呈せる大形二枚貝にして、大島古仁屋附近にて養殖せらるる天然にも多く棲息をするを見る。大形眞珠を産し、又貝殻は種々の貝細工、貝釦として利用頗る多し。

## 大 島 貝 類 目 録

### 巻 貝 の 部

	長さ	高さ	巾
スイジガヒ	160(mm)	65(mm)	
ホラガヒ	200	80	
ウヅラガヒ	110	75	
イトマキボラ	136	60	
ナガイトマキボラ	120	40	
ツメタガヒ	80	41	
オホナルトボラ	146	90	
オニコブシ	75	40	
コオニコブシ	37	26	
オキニシ	60	27	
チトセボラ	85	25	
クモガヒ	140	44	
ベニソデ	55	22	
ウラスデマヒノソデ	79	30	
マヒノソデ	78	30	
フヂツガヒ	52	23	

種	高	長サ	高サ	幅
リウキウツノマタ	11	57(mm)	26(mm)	
ハリサザエ	12	直徑	25	20
コジダカギンタカハマ		直徑	40	50
ウラウツガヒ	6	直徑	40	32
ウヅイチモンヂ	41	直徑	31	23
ムラサキウヅ	28	直徑	40	34
テングガヒ	6	11	170	100
ヤクワウガヒ	11	18	120	65
サラサバテ	101	直徑	70	60
リウテン	8	02	50	34
テウセンサザエ	22	84	80	40
スギシヨウガヒ	41	02	62	30
リウキウヘビガヒ	22	直徑	20	
オホヘビガヒ	11	直徑	5	
ホソスヂテツボラ	41	12	65	30
テツボラ	11	38	46	22
ニシキ、キバ	72	13	60	20
カンキク	12	14	23	13
ムラサキガイハン	22	20	39	27
コモンマクラ	12	74	45	17
ジュトウマクラ	41	22	56	20
サツマツブリ	12	18	120	45
キマダライガレイシ	10	01	21	14
ヤナギシボリダカラ	10	10	27	12
ヒメホンダカラ	10	31	32	17
ハナマルユキ	6	71	33	20
ホシキヌタ	11	12	34	20
アミメタカラ	8	51	33	16
キイロダカラ	7	51	21	11
メンガタタカラ	11	02	25	12
ジャノメダカラ	11	02	31	13
イボダカラ	20	02	20	10
タルダカラ	20	71	53	27

	長サ	高サ	幅
カノコダカラ	22(mm)	11(mm)	
クチムラサキダカラ	36	21	
チドリダカラ	17	10	
チリメンダカラ	17	9	
ハナビ ダカラ	27	14	
ヤクシマダカラ	53	32	
アラムシロ	14	9	
コケフデ	31	12	
イソニナ	21	10	
ハマヅト	20	8	
バ イ	48	25	
マルシロネズミガヒ	20	14	
タガヤサンミナシ	55	25	
アジロイモ	26	13	
マダライモ	21	14	
シロアンボイナ	36	19	
マガキガヒ	54	27	
ゴマファイモ	41	21	
ヤナギシボリイモ	63	32	
イボシマイモ	45	24	
ムカシタモト	28	14	
サラサモドキ	34	21	
フトコロガヒ	10	6	
シダレシマヤタテ	16	9	
イシダタミ	13	16	
タモトガヒ	17	9	
シワフウリンチドリ?	21	11	
コシマヤタテ	15	8	
ヒメクワノミカニモリ	15	7	
ニシキアマラブネ	29	14	
ザウゲタテ	39	19	
オノツノガヒ	86	36	
タケノコガヒ	117	20	

	高サ	長サ	高サ	幅
タウガタカニモリ	17(mm)	46(mm)	17(mm)	
クロミナシ		44	24	
ムラサキツノガタモドキ		19	10	
ノシガヒ		14	75	
トガリコトツブ		31	12	
ナツメガヒ		23	13	

以上 92種

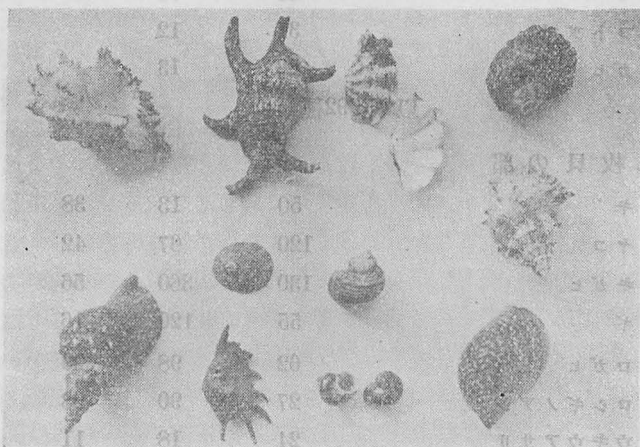
## 二枚貝の部

カキ		50	13	38
ヒレジヤコ		120	67	42
ハバウキガヒ		130	360	56
タヒラギ		55	120	16
スエヒロガヒ		62	98	20
チャイロシギノアシ		27	90	23
ヒメリウキウアサリ		24	18	11
シラトリガヒ		40	32	18
サメザラ		55	53	28
ムラサキガヒ		39	20	13
ヒメシラトリガヒ		30	25	16
リウキウマスホ		57	39	28
サメザラモドキ		24	23	24
キクザルガヒ		20	26	24
マベ (幼生)		32	32	12
クジヤクガヒ		20	35	16
ヨシガヒ		30	16	10
リウキウザルガヒ		64	75	46
ケガヒ		13	27	13
エガヒ		57	33	28
リウキウアサル		40	28	7
メンガヒ		54	57	34
リウキウサルボウ		40	50	36
カハラガヒ		43	48	40

シレナシジミ? (mm) 71 (mm) 61 (mm) 67 (mm) 34

以上 25

奄美大島産貝類の一部



テングガヒ スイジガヒ ヒレジヤコ ヤクワウガヒ  
 オホベツカウ テウセンサザエ オホナルトボラ  
 ホラガヒ クモガヒ リウテン ウヅラガヒ

一枚貝の部

ミミガヒ	66	77	12	32
トコブシ	32	78	17	55
イボアナゴウ	33	50	12	34
オホツタノハ	33	85	16	65
マアナゴウ	32	37	9	30
オホベツカウ	31	71	22	57
カサガヒ	31	40	15	34
クヅヤガヒ	31	13	3	8
キクノハナガヒ	31	16	4	10
コビトカラマツ	31	11	3	8
コウタカラマツ	31	20	10	19
ウノアシ	31	15	5	11
ヨメガカサ	31	17	4	13

以上 13種

## ギンモクセイの大木

日 高 醇  
日 野 卯 一

宮崎縣東諸縣郡木脇村塚原渡邊又一氏の屋敷内の渡邊家の氏神様の祠の門に生えて居るものである。1934年10月13日、實見する事を得たので茲に報告する。樹は高さ約10m胸高周1.98mあつて樹幹には大きな空洞を生じて内部は殆んどなくなつて居る。地上2m位の部分から分岐して居る。ツタの大きな蔓が全面を覆つて梢に迄もその尖端が及んで居る。樹は割合に枝を擴げて居ないが割合こんもりした恰好であるが、此れは樹の東南に當つて、約3m位を距てて四時水があるらしい水溜がある爲めに地下水が高い關係であらう。現在までモクセイの大木としては、宮崎縣南那珂郡飫肥町吉野方山本の伊地知重一氏宅のものであるが、此れはキンモクセイで、大きさは周り1.85m高さ約12mであり、樹齡約300年と稱せられる。それで渡邊氏宅のギンモクセイは他縣の報告は聞かないが、宮崎縣としては最大のものであらう。樹齡も推定する所では伊地知氏宅のものと同様に約300年位と推定される。渡邊氏の家は塚原の南端に位して居る。同氏の家は非常な舊家で、血を以つて書れた家系圖に依れば、木脇村定住以來又一氏を以つて9代目であると云ふ事である。氏神様の祠内には女人禁制ださうである。樹は氏神様の御神木ではないらしく、他に御神木としてはマキの古木が祭られて居る。先年買手が來て買受けようとしたが、渡邊氏の10000圓ならばの一言に僻易して退却したさうである。

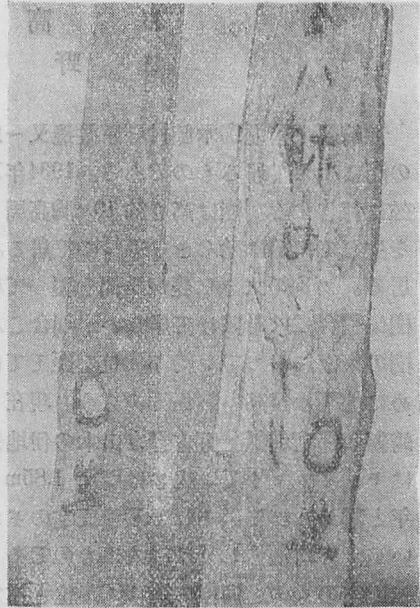
## 材中に残れる落書の痕跡

日 高 醇

宮崎縣宮崎郡廣瀬村松小路青木茂氏が所有されて居るものである。1933年1月、青木氏の附近に小さい社があるがその境内にあつた樹を薪とする爲めに切倒して割つて居るとき、一撃を與へると台にして居た木

に通る程氣持よく割れたが見れば神なる字が判然と現れて居る。此れは神様が何か、樹を切つた爲めに御怒りになつたものと思つてそれを割つて居た人はその社に奉らうとした。所がそれを聞いた青木氏は色々説いて貰ひ受けられたものである。1934年7月1日、著者にその字の材の内部に残つた理由の説明を求めて、青木氏は著者にその木を貸與された。

樹種はムクエノキ?と思ふが確ではない。落書の中判然と判る文字は「……神靜ナリ〇生」である。皮部はその部が剥れた爲めに、唯「ナリ」と剥れて現れた木質部に残つて居る「〇生」のみである。字のある位置は木質部を材に直角に突通せば外部の字の位置と重なる。外部の字



は材の肥大と共に大きくなつて内部のもの約2倍になつて居る。材の内部の字の色は濃褐色を呈して居るが、この落書は小刀の類でなされたものらしく、それらしい切痕がある。丁度形成層の部分まで切込まれた爲めに、形成層は刺戟を受けてその部にタンニンの誘導體色素の如きものを集積したものであらうと思はれる。形成層はその後は正常に戻つたらしく、普通の木質を生じて居る。字のある所は皮の部分から2.8cm位で年輪を数へると約8年位を經過して居る。

かゝる落書の材の中に痕る事は今迄に記録されたものを知らないが。樹種、時期、傷の程度によつて依るものと、痕らないものがあらう。殊に傷の深淺には至大の関係がある事と思ふ。

精 高 日

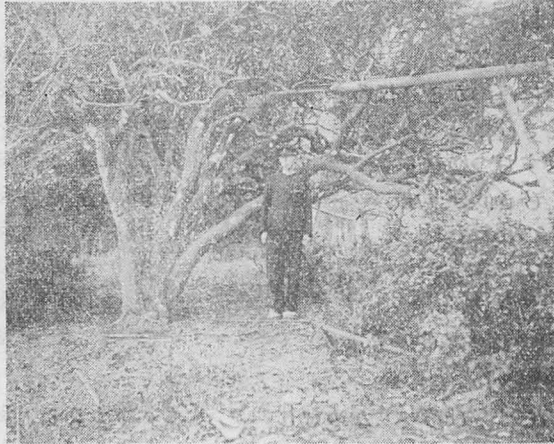
さるものゝさる樹丁はさる樹にさる木質部は小刀で切られ、その部は、(1)平2001  
落書部はさる材の内部のさる部は、(2)平2001  
木質部丁にさる部は、(3)平2001



## コミカンの古木

高田 醇  
伊地知 重基

宮崎縣宮崎郡佐土原町佐野原外山源次郎氏の屋敷内に在るもので、3年前までは2本あつたが、3年前に枯れて現在は1本になつて居る。生きて居るものは根廻り189cmあり、地上50cm位の所から4本に分枝し



て居る。その各は82.4cm、77cm、52.3cm、95.9cmある。高さは約5m枝の擴りは東西7m南米10m位となつて居る。枯れたものは切株があるがその根廻り78cmである。2本とも生きて居た頃の最高生産量は拾數年前に16俵も結果したと言ふが、現在は結果は餘程減つたらしく、採つては賣り、又は喰つてしまつて判らないと言ふ。

外山氏の屋敷の東に隣つて、島津忠雅公、(約270年前)の別邸の跡がある。外山氏の祖先はその家番として其處に定住する事になつたもので、源次郎氏で6代目であると言つて居る。コミカンが渡來したのは約250年前と言ふ事になつて居るから少くともそれ以後のものであらうが兎角随分は古木である。

本記録は昭和十年一月七日、本校遠藤助教と共に調査した結果による。

## 11月の丸島昆虫

高島田政壽

1934年11月11日、宮崎市大淀川中にある丸島に採集せるものである。

## 總尾目

し み し み科

## 粘管目

くろふひかけながとびむし つのとびむし科

## 直翅目

つちいなご	ばつた科
おほみつかきこほろぎ	こほろぎ科
くさひばり	こほろぎ科
せすぢつゆむし	きりぎりす科
くびきりぎりす	きりぎりす科
くつわむし	きりぎりす科
おながささきり	きりぎりす科
かまきり	かまきり科
さつまできぶり	ごきぶり科

## 半翅目

ほしはらびろへりかめむし	へりかめむし科
ほそへりかめむし	へりかめむし科
ひめほしかめむし	ほしかめむし科
くもへりかめむし	へりかめむし科
もんしろながかめむし	ながかめむし科

## 鱗翅目

いちもんじせせり	せせりてふ科
このまてふ	じやのめてふ科
つまぐろきてふ	しろてふ科

## 膜翅目

きあしながばち	すずめばち科
---------	--------

## 雙翅目

しまはなあぶ	しよくがばへ科
--------	---------

## 鞘翅目

こがしらごみむし	をさむし科
----------	-------



## 宮崎リンネ會略史

### 會務報告

第52回例會 於合併教室 1934.4.23

講演

- |                |           |
|----------------|-----------|
| (1) まつたけの話     | F III 大村君 |
| (2) すみれ漫談      | A II 飯田君  |
| (3) 臺灣旅行記      | A III 日高君 |
| (4) くらぶうみへびの生活 | 中島先生      |

新入生の歓迎をかねて本年度の最初の例會を開く。新會員並びに舊會員の出席者多数あり非常な盛會であつた。

出席者 遠藤、松原、北尾、中島の諸先生

AIII 野中、半田、日高、吉盛、福井、蛸原、佐野、加峯、伊知地、AII 高松、日野、日高、松本、岸本、平川、齊藤、毛利、野中、池邊、飯田、玉村、大塚、松永、前田、田中、藏永、楠本、知、AI 堺、長友、岸本、日高、吉川、樋口、佐藤、井上、岡迫、木田、北野、青木、大崎、桐山、田之上、矢野、甲斐、高木、豊島、佐藤、奥原、川人、高島田、松本、相浦、川久保、吉住、二見、FIII 大村、FII 菊地、常深、安戸、吉江、宇都宮、FI 草野、日高、緒方、高草、高島南、永山、井出、内田、近藤、酒井、佐藤、ZII 中野、中武、佐伯、近藤、境、坂口、西木、山下、小柳、高濱、ZI 北富、川富、岩坂、石井、有富、榎園、森永、京極、堀木田、吉松、酒井、星、鍋田、米良、堀、鈴木

第53回例會 於合併教室 1934.6.15

(1) 天然記念物山口縣麻里布附近の白蛇に就いて

A III 隅野君

(2) 古生物化石について(宮崎産) A II 大塚君

(3) 細胞分裂特に花粉母細胞の減數分裂に就いて、標本供覽

井上先生

講演後新入生幹事の補選を行なふ例の如く舊幹事が推選するこゝをさした。

AI 高島田君、FI 山河君推選

出席者 松原、中島兩先生、AIII 原田、日高、福井、隅野、AII 福井、前田

赤司、井手、齊藤、日野、大塚、A I 二見、奥原、谷口、指宿、桐山、矢野、樋口、川久保、木田、青木、川人、高島田、豊島、堺、高木、松本、大崎、吉住、吉川、日高、F III 大村、F I 樋口、近藤、内田、草野、高島、山河、酒井、Z II 佐伯、Z I 米良、北富

第 5.4 回 例 會 於 合 併 教 室 1934.9.19

講 演

- (1) 虫癭に就いて A III 伊知地 君  
 (2) 天草旅行記 A II 楠 本 君

第 1 學期の試験前のこまごまと出席者は少なかつた。

出席者 25名

第 5.5 回 例 會 於 動 物 教 室 1934.11.30

- (1) 高鍋地方の日置層化石に就いて A II 日 野 君  
 (2) 木に落書をすべし、木質部迄達した落書の傷痕が完全に癒合した後に其の材木を割つたのに其の落書が完全に明記せられて居る例 A III 日 高 君

- (3) 椎葉紀行 淺 野 先 生

出席者 淺野先生、北尾先生、中島先生、遠藤先生

A III 蛭原、日高、半田、伊知地、坊上、隅野、A II 飯田、日野、高松、中尾、松本、齋藤、A I 大崎、松本、佐藤、高島田、矢野、甲斐、川人、堺、高橋、田之上、豊島、木田、桐山、松村、二見、奥原、吉住、F III 大村、F II 吉江、F I 高島、Z II 中野、Z I 石井、北富

第 5.6 回 例 會 於 動 物 教 室 1934.12.18

- (1) ひかり藻について A I 高 木 君  
 (2) 屋久島に就いて F III 大 村 君  
 (3) まつの木の話 宮 澤 先 生

出席者 宮澤、北尾、淺野、小松、中島、松原、遠藤の諸先生

A III 日高、伊知地、加峯、蛭原、宮原、A II 玉村、飛高、齊藤、野中、玉寺、澤口、橋本、日野、A I 豊島、矢野、二見、高島田、堺、田 上、吉住、青木、松本、川人、川久保、F III 大村、F II 吉江、F I 山河、Z I 石井

第 5.7 回 總 會 於 合 併 教 室 1935.1.31

講 演

- (1) つげのめいがに就て A III 原 田 君  
 (2) やごの研究 A III 七 搦 君  
 (3) 南米の生物 校 長 先 生

講演終了後會計報告並びに業務報告をし終つて新幹事の任命にうつり二年生一年生現幹事留任となる、

出席者 校長、小松、松原、宮澤、北尾、中島、遠藤、池端の諸先生及四本氏  
牧場から大神氏が出席された、A III 日高、中尾、佐野、坊上、七棚、原田、  
A I 飯田、日野、岡田、玉村、飛高、玉寺、楠本、A I 豊島、青木、井上、高  
木、田上、佐藤、指宿、土居、日高、松本、桐山、堺、平、吉川、大崎、矢野  
高島田、F III 大村

#### 採集會

5月13日、丸目山

5月12日、13日、尾鈴山

好天氣に恵れて非常な盛會であつた。

6月16日 學藝大會に於ける會員代表の講演

植物毛茸の生態學的意義に就て A III 伊地知君

12月22日 校長先生歸朝紀念學藝大會に於ける會員代表の講演

青島ビロ-樹の生因に關する考察 A II 日高君

(幹事)

### 編輯後記

漸く第九號を發刊する事になりましたが、種々の事情で非常に豫定より遅れま  
した事を深く御詫び申さればなりません。

本號の原稿は極めて集りがよかつた爲めに編輯子は財政困難なりソネ會の限ら  
れた經費から、數名の諸兄の原稿は遂に本號に掲載出来なかつた事は誠に遺憾  
です。該稿の筆者諸兄に深く御断り申上ます。

原稿を拜見しての編輯子の希望は第8號の編輯者の言を全く同感でありました  
丁寧な原稿は何れ丈編輯の手が除かれ、又印刷が易くなり、従つて印刷費の節減  
出来るか判らない。原稿用紙一枚の中に20字もの訂正しなければならない文字が  
あるやうでは、逆も正確な信用し得る論文とする事は困難でありませう。1字の  
間違で全論文に味噌を附ける事はよく在る事です。此の點は是非改めて戴きたい

本會に多年多大な御盡力を忝うして参りました、日野教授は目下佛國パリ-に  
御滞在中で至極達者に御研究中です。

筆を擱くに當つて諸兄の健康さ一層の隆昌を祈つてやまない。

## 投 稿 規 定

1. 生物學に關係ある論文で、獨創的なものであること。
2. 生物に關係ある寫眞、スケッチの類も歓迎する。
3. 論文中の挿圖は必ず墨書のこと。
4. 假名は平假名、外國語又は原語片假名書のこと。動植物名は片假名書が都合よい。
5. 論文は本會規定の原稿用紙に書くこと。
6. 紙上匿名は許さない。必ず科年姓名を明記すること。
7. 原稿の取捨は幹事に一任のこと。
8. 原稿送附先は、宮崎高等農林學校宮崎リンネ會編輯部宛のこと。

### 第 八 號 正 誤 表

頁	行	誤	正
649	14	らん科	全部抹消
649	15	ヤブラン (Liriope minor Makino)	649頁18行の次に移す

昭和十年三月一日印刷

昭和十年三月七日發行

發行所 宮崎高等農林學校リンネ會

編輯兼  
發行者 リンネ會報編輯部

宮崎市高千穂通二丁目

印刷者 壹 岐 晴 繁

宮崎市高千穂通二丁目

印刷所 平 和 印 刷 所

電話 五 六 四 五 番

